

大鹿卓著

詩集兵隊

文藝社發行



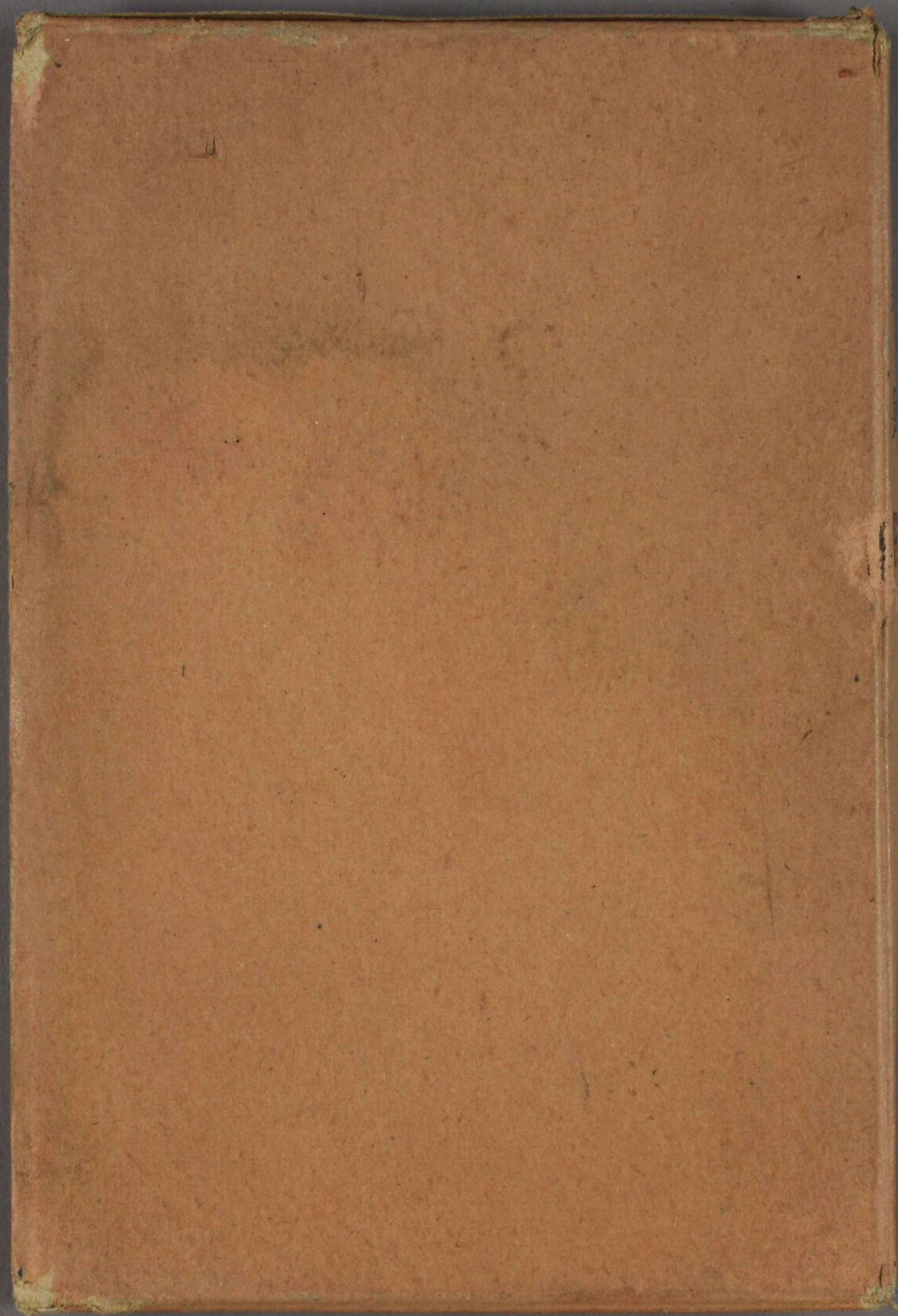
詩集兵隊

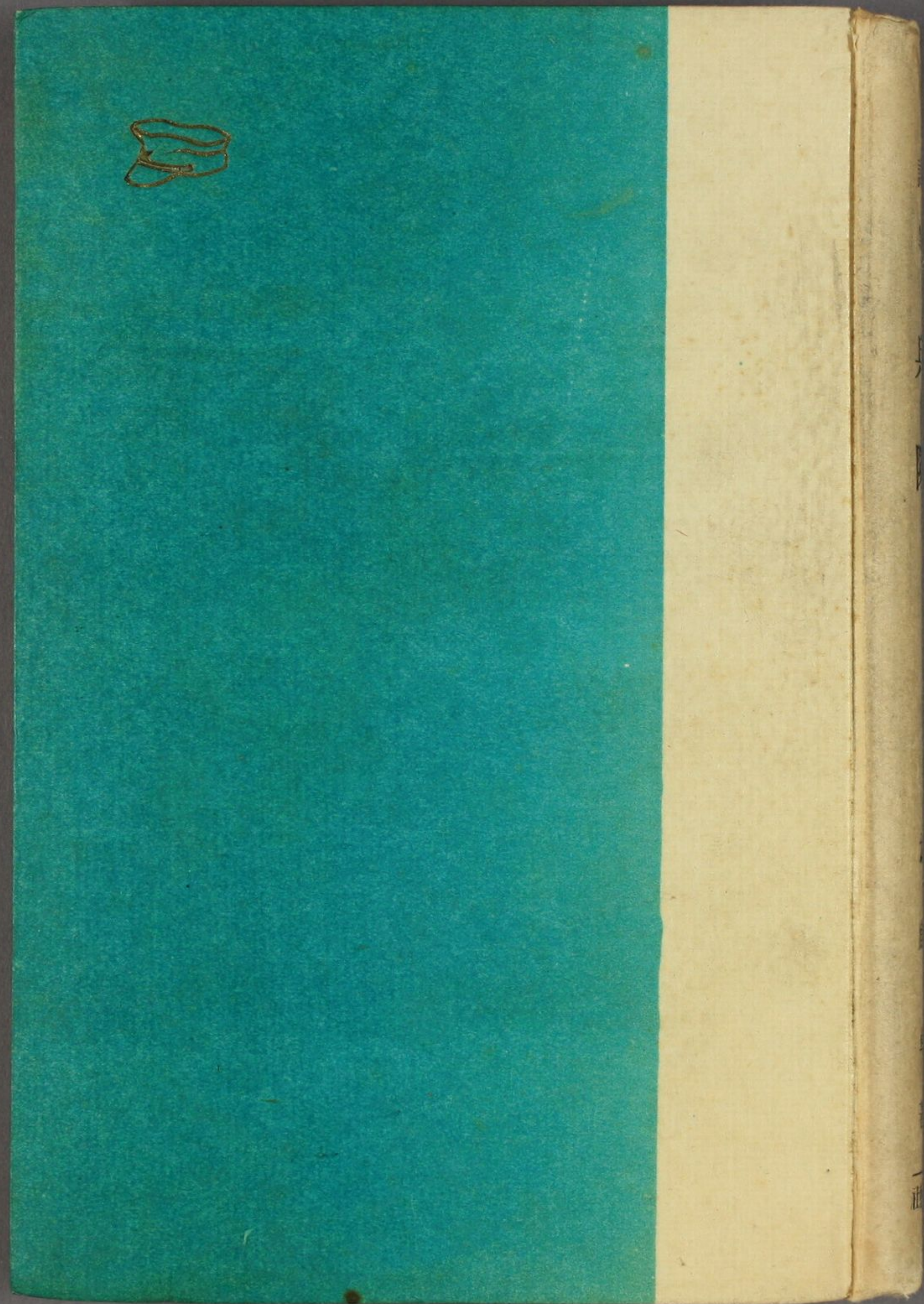
大

鹿

卓

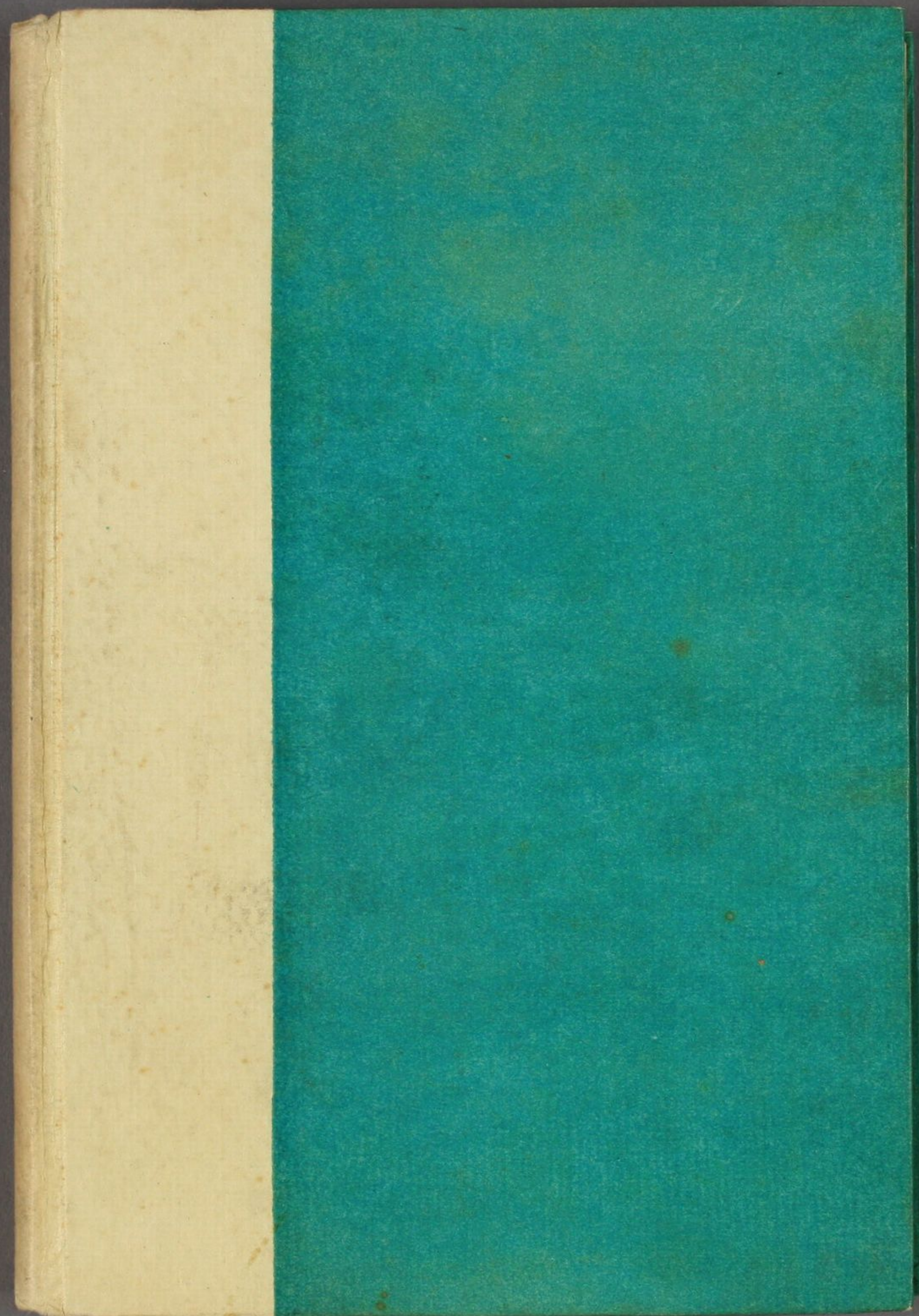
著

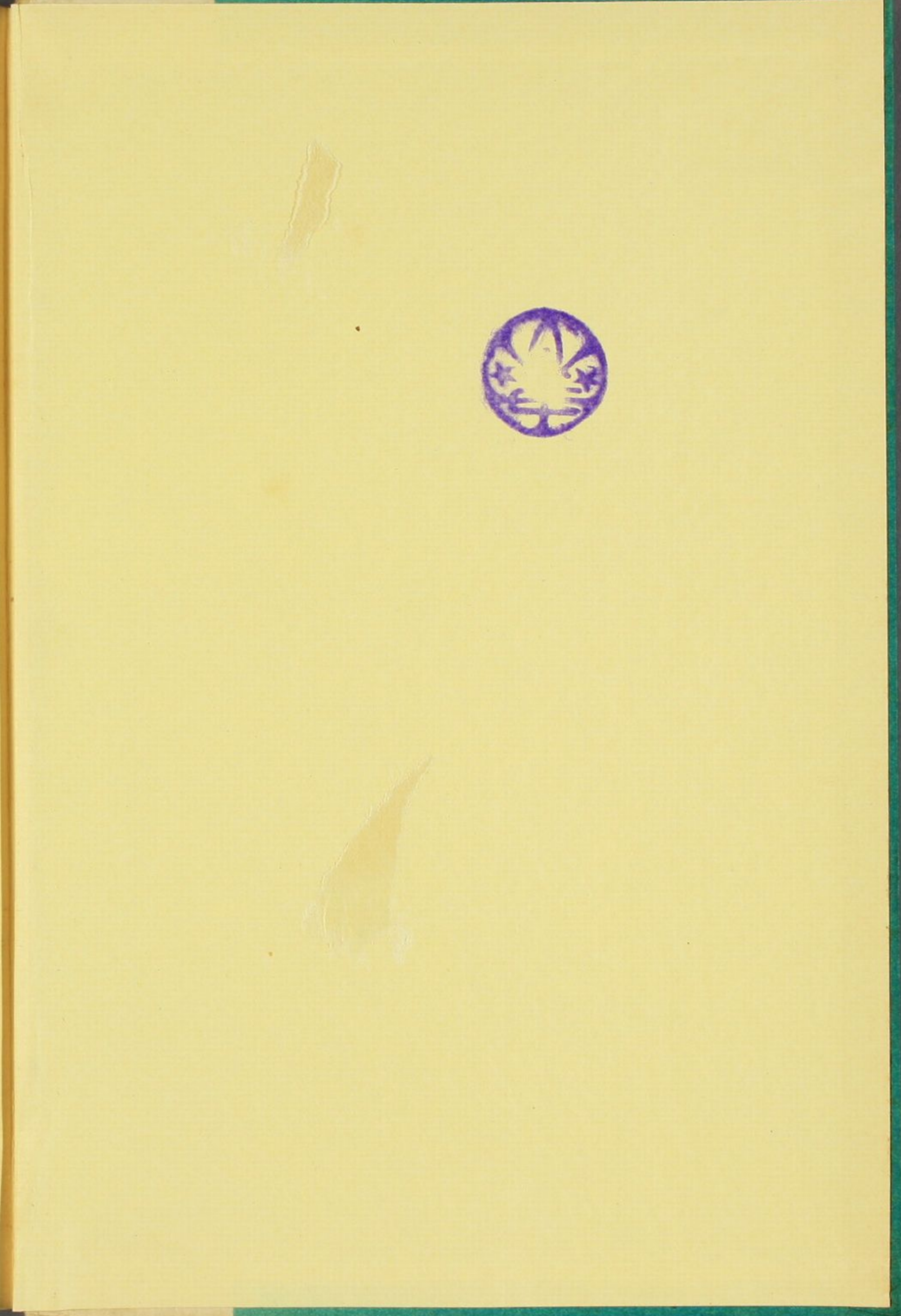
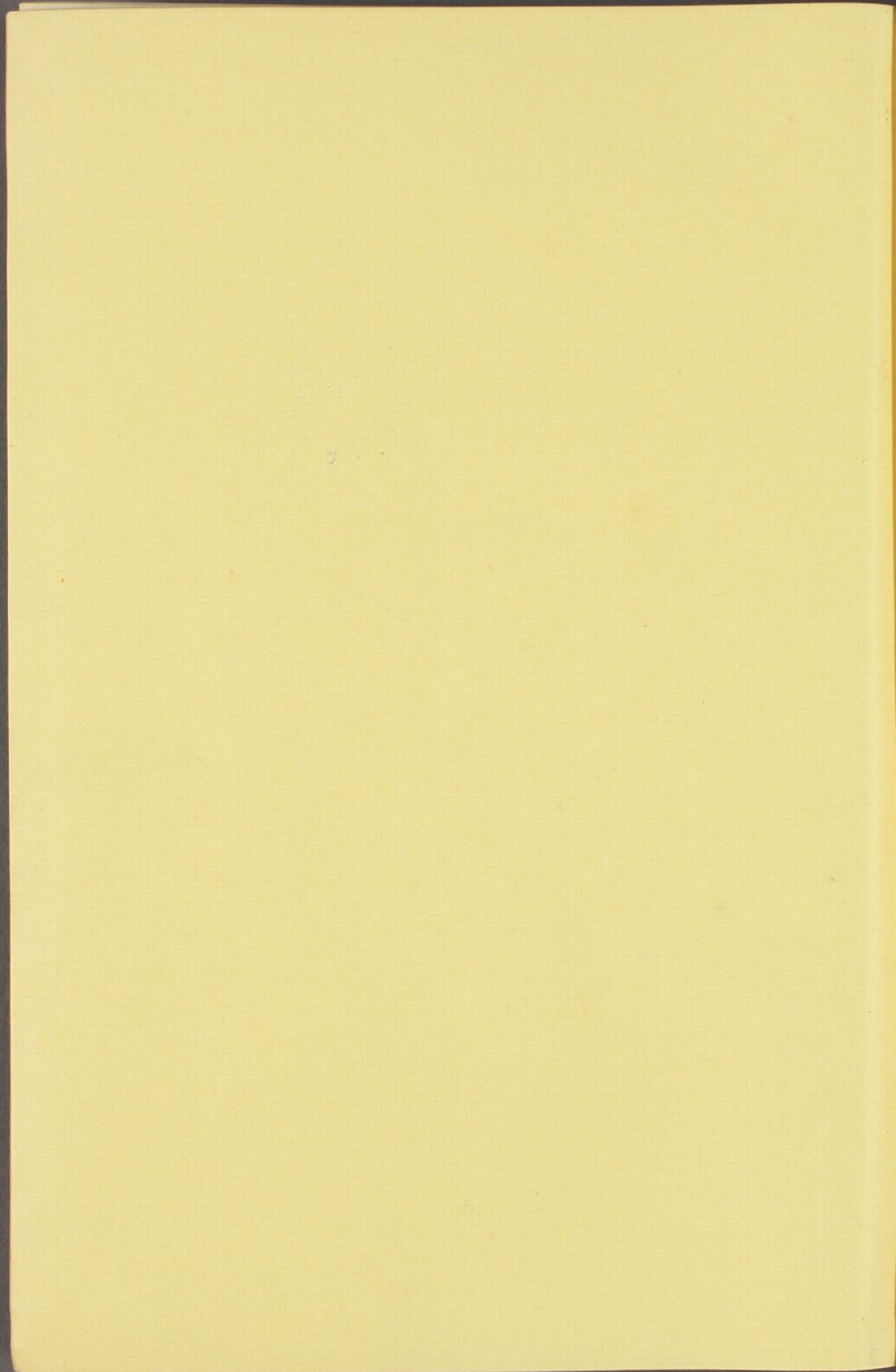




詩集
兵隊

大鹿卓著
——
社藝文



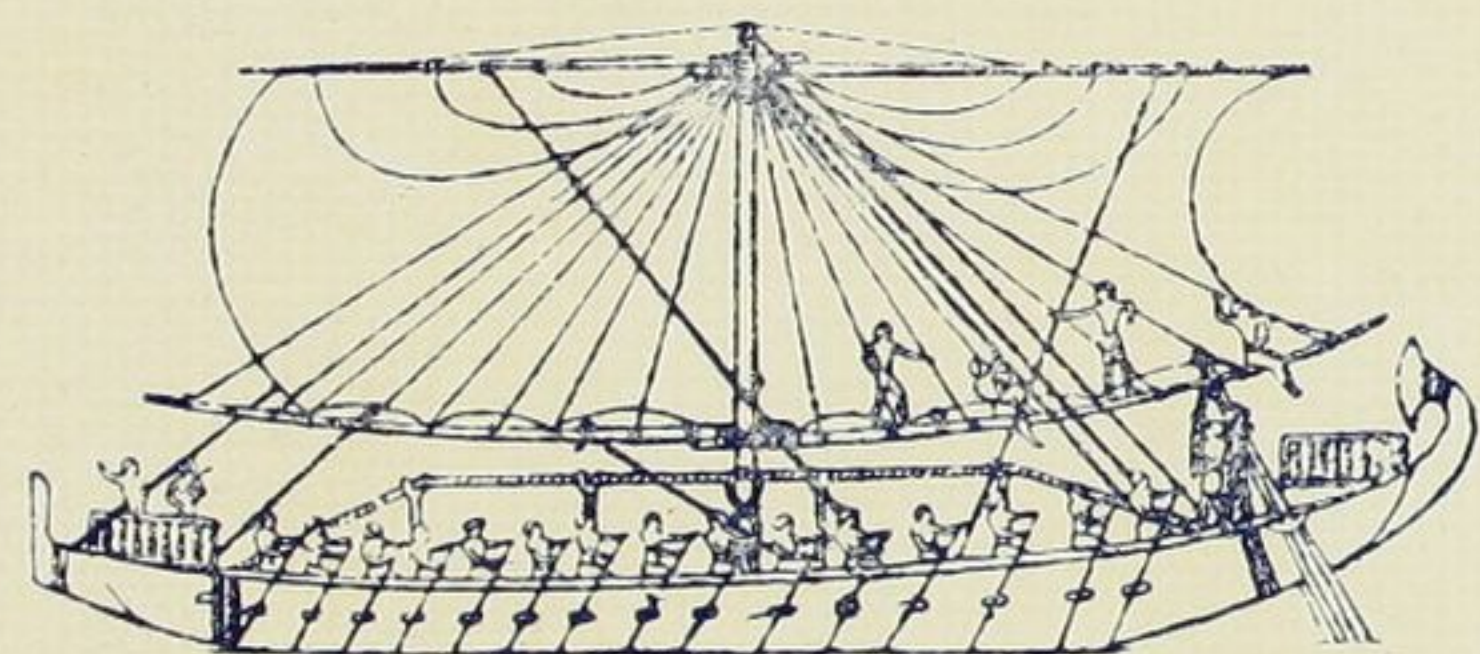




集 詩

隊 兵

著 卓 鹿 大



1 9 2 6

版 社 藝 文

序

大鹿卓の詩集が出る。詩の評価は、兄として自分からは何も云はぬ。たゞ、風景畫時代から、否もつと以前から、淺草の寓居の一錢蒸氣のみえる二階のふとんの中で、コツコツ書いてゐたものが、實をむすんだことに一種の感慨深いものがある。相當によいものであれば、自分の欣はこれに過ぎるものがない。不遇と云へば一體自分達の連中は不遇で、その罪はひとへにかゝつて自分にあるのかもしれないが、さきに國木田虎雄を送り、今また大鹿卓を出したことは、自分として内心で、鼻が高い次第である。世に認められかたがおそかつた代りには、これから充分自分の力を發揮して、後來の藝壇に雄飛してもらひたい願である。

金子光晴識

自序

自負と自己嫌悪は凡ての記録らしきものを拒絶した。それ故たゞ詩のみが私の録しえた精神であり粉色でありその他である。まことに青春十年は詩への愛慕のために所謂青春ではなかつたといふも徒らな逆説ではない。

私に餘りに短かかつた感傷の頃の慰撫も忘れ難く、北國流滴三箇年の郷愁のよき同伴であつたことも感謝であるが、この詩による苦き愉悅の刻が若き心情への誘惑以上の誘惑として私を捕へたのは寧ろ其後である。遇々一家の蹉跎に遭ひ、學究を捨て、生活に自持を失つてゐた碌々の日々は弱齡の私をして早くも人生行路に倦怠の巨石を抱かした。實にその頃から私の性情は反つてミューズの聖火への接近を羽撃いた。しかもそれは意力以上のものゝ何といふ悪戯であつたらう。私は古き概念の殻を脊負つて火圏を迷徊しなければならなかつた。苦惱こそ性情への痺薬であるといふも、誰かよくこの焦躁の間にあつて自らの稟性に信頼を続けうるものがあらうか。

しかし絶えず強い響を傳へて傍にあつた兄光晴の鼓撃は、私を直接導くことをしなかつたけれども、自ら私の模索によき環圍を與へた。而して幸にも兄との性情の相違に自覺を忘れなかつた私は、そのための一層の刻苦を潔しとした。若しこの苦惱と共に加はる愛着がなかつたなら私は夙く性情を黒き屍に終らしめたであらう。とはいへこの長き試練の日こそまた私の脱衣の刻であつた。

「焚火」諸篇の日々は感受を繊細へ、感情を流動への願望であつた。漸くにして詩作は私自身をより多く顯現する發想と表現にまで到達した。「空氣銃」はその試作の前期であり「公園」は後期である。殊に後者は視野と感覺とに於いて私自身に加ふるものがあつた。かくて長き試作の後、私は新しい精神への高翔を喜悅した。「兵隊」「漁夫」「獵師」「潜水夫」の諸篇はこの意義に於いて私自身の劃時代である。またそれは青春を賭けて得たわが第一の戦勝標である。

しかし私は自身に於ける絶對價値を直ちに他に要求しようとするものでない。作品に就いては彼自身の語るところに託すべきであるを知る。こゝには私の唯一であるが故に羞恥の閱歷を刻したに過ぎぬ。

漁

夫

ヒアノ曲

高

田

守

久

Andante

Handwritten musical score for the left page, featuring piano and string parts. The score is written in 6/8 time and includes dynamic markings such as *pp*, *mp*, and *rit*. The piano part consists of two staves, and the string part consists of two staves. The music is characterized by flowing lines and delicate textures.

Handwritten musical score for the right page, featuring piano and string parts. The score is written in 6/8 time and includes dynamic markings such as *string*, *atempo*, *p*, *mf*, and *rit*. The piano part consists of two staves, and the string part consists of two staves. The music continues the melodic and harmonic themes from the left page.

Allegro

f

glissands

glissands

54

55

56

or. ca.

p

Andante

p

p

p

Detailed description: This page contains a handwritten musical score for piano. It begins with the tempo marking 'Allegro' and a forte dynamic 'f'. The score is written in two systems, each with two staves (treble and bass clef). The first system includes two instances of the word 'glissands' written above the notes. The second system contains numerical markings '54', '55', and '56' above the staves, and the instruction 'or. ca.' (or caesura) above a measure. The tempo changes to 'Andante' in the third system, which starts with a piano dynamic 'p'. The final system also begins with a piano dynamic 'p'. The notation includes various rhythmic values, accidentals, and phrasing slurs.

p

pp

Detailed description: This page continues the handwritten musical score from the first page. It consists of two systems, each with two staves. The first system begins with a piano dynamic 'p'. The second system includes a pianissimo dynamic 'pp' and features a prominent crescendo hairpin. The notation continues with various rhythmic patterns and phrasing.

兵
隊

生の最も鮮明な時は我掌にある
蒸香もて區劃る時代は我掌にある
金子光晴

兵

隊

兄弟！ 何を考へてゐるんだ。

銃を握つた手に葉蔭が戯れてゐる。

掃除が出来たら銃口をのぞいてみる。

ラムネ玉のやうにつまつてゐる青空で

梧桐の葉が鷄を羽打くのがきこえる。

そこでお前は思ひを皆んな故郷へまで發射させる。
その銃身の西洋錐のやうにねぢれた光にそつて。

俺は湯になつた水筒の水を飲んで、

鐵臭い匂ひの中で、水道と女の齒を思出すのだ。

兄弟！ 背囊のやうに草の中へ轉がらう。

からだの重味で草汁が脊中へ浸み移つてきても
草から砲丸のやうな頭をもたけるのは嫌だ。

兄弟！ お互が傍の呼吸と體臭を忘れてるよう

空が餘り青いから顔の色も染つただらう

頭腦の中の（故郷）へ土の冷えが浸みこんでくる……。

はつと持上げた首がボブラの影を草に見る

其處に草を喰ふ馬の首はなかつた。もつとも今日は安息日

俺は彼の馬への愛着を發見した。

俺に生れたこの悲しい習性に呪われ！

銃銃銃……靴靴靴……みんな呪はれてあれ！

兄弟！ お前のよく寝てる頬をなくらしてくれないか！

厩は便所よりも空想によい暗さだ

馬の尾のさばきと齒の噛み合ふのをききつゝ
晝寢に遊ぶ木洩れ陽のほてりを顔に感じる。

兄弟！ 貴様の眼は泣いてゐるやうに光る

馬の臭ひがすると云はれたのを氣にしてゐるのか！

銅貨の臭ひのするその女の乳房を思つてゐるのか！

打倒れて顔を埋めた藁に様々な臭ひを嗅ぎつゝ

數へるほど長くなる日曜までを數へろ。

目の前で一つの馬の尻が笑つてゐる

その隣りで桶のやうな首が鼻を鳴らす

さあ兄弟！ 馬の頸をたゞいて周らう

黒い硝子の眼は指で押せばラムネが迸るかもしれないんだ。

漁

師

樹蔭はまだ俺に網シャツを着せてゐる

毛脛から太腹の方へ微風が撫でてゆく

馬車の通るやうな重い波音を頭まで運びながら。

蟬かと思つたら奴の軀か。さて俺ももう一眠入りしようか

海はやはり石垣の龍舌蘭を刃物に磨いてゐるだらう。

嬢はてんぐさ採りに出かけたのか

家の中はがらんどらしい。隣家では牛が退屈がつてゐる。

犬は石段で寝てゐるのか。

この蓆は樹皮のやうに痛い。俺の肩は縞になつた。

嬢は今頃海へ潜つてゐるだらう。二本の足が油雲へ突きさゝり……青い水の中を

尻が空を向いて落ちてゆく……

立上る俺の蔭が樗より長くなる夕べまで

もう一眠入りだ

雲が嬢の腰巻よりも赤くなるように

出漁の海が月経よりも赤くなるように。

夜明けだ！

夜明けだ！

夜明けだ！

黒インキの水のなかへ漬けて置いた

錨と俺達の心を引上げよう

洗面器のやうに青い朝霧に顔を洗はせつゝ

俺達のからだをバリカンの齒のやうに組合せよう。

長い櫓が青いうねりを庖丁で切り

腕は鐵の機械のやうに休みがない。

兄弟！ 俺の腹に響くお前の腰の力

俺もお前と同じことを考へてゐるのだ。

女が太股をはだけて雨戸を繰る頃だ

帯を結び換へるために乳房をぶるぶる振はせる頃だ

女、女、女……俺たちは還つてゆく。

間もなく岸壁が霧の中から

鯨のやうに現はれるだらう

岩の上の女達の髪を朝の陽が染めてゐるだらう

兄弟！ 今日繫留索ちやひづなを投げつけるのは俺の番だ。

だが俺達は互に心を隠して、

雪のやうな泡の中へ魚籃とともに飛び下りるだらう

女の眼にはこの禪の白さが痛く沁むだらう

俺の鼻先で舟を押す女の尻が大きく動くだらう。

瓦斯燈のやうな魚の光りで、俺は女の顔を読むだらう。

3

俺の糸を警報機のやうに引ばるものがある

……父親。父親。黒い昆布の中の父親

噴霧器のやうな風に仕事着は濡れて

……五臓の疲れか、俺はやつぱりランプより気儘な舟の中に入れた。

どうか鉤には何もかゝつてゐないやうに——

舟縁で青銀の匕首がはね廻つた

電氣のやうに痺れる魚を握つて、俺は黒い目玉を見据えてゐたが
下唇を噛んで舟底へ投込んだ。

海は化物の瓦斯ランプの燃えるのを聴いてゐる

櫓は舟縁をなめる舌をきいてゐる

水母、水母、水母、波の上での黑影が浮き沈みしてゐる。

仲間の奴等に返事なぞしてやるものか！

俺のあぐら跌は舟底の跳ねる魚を聴きわけてゐる。

指の股の鱗は煙草入の中へしまつて置かう。

青い霧の曉になつたら舟底の獲物の中から

俺は再びあの眼を探し出さうと思つてゐる

再びあの青い魚に感電したいと思つてゐる。

獵 師

この徑は樹根が多いから

肩で鐵砲がとび上る

その度に俺は女を思ひ直してゐる。

白犬！ お前はよくはすむ護謨玉だ。

よし、もつと急がう。落葉達の聲を呼び醒しながら
徑に落ちた木洩れ陽の羽毛を浮立たせながら。

白犬！ お前の耳を枯葉のやうに動かせろ！

雉子だ……昨日も雉子だ。一昨日も雉子だ

だが、今日の俺の尻をたたくのはまだ煙草入ばかり。

いまましい思出だが、しかし淋しいぞ

倒れ木の葉から尻毛の見た夫婦雉子

二羽だつたことが打つのを躊躇はせたのか？

椎の木肌に押しつけた心臓が冷々と縮んだためか？

精液にいた樹液の香に咽せたためか？

然し俺は鐵砲を身がまへると父親そつくりになるのだ。

白犬！

そのとき、眼と耳とに精銳な氣魄を表はし、

銃口から俺の火がとび出すのを

白犬！ お前もどんなに待つだろう。

俺は白い煙の間は、弾丸のやうなお前を見たではないか！

白犬！ 水の飲みかたは洗濯だ。

俺の掌は苺の火の殻子遊びをしてる。

乳房より滑かで冷い石の上

木洩れ陽の軟かな石鹼の泡に

鐵砲と雉子が息を吹き反へさうとしてる……

俺は瀬音に母をきょつゝ眠くなる……

……赤棟蛇だ！

鎌首だ！

咬へていつたのは俺の臓腑ではなかつたか！

水の上の赤い腹は

鍛冶屋がジウ……と水にさす火の刀だ。

俺の虚な心は水を切る鱗を瀬音の中にきくわけてゐる。

（明方よりも青い霧のなかを、樹々は皮茸小屋よりも太く傾いた。

蛇の腹の丸木舟が滑つてゆく

人を咬へた首を炬火と差上げ……。

……俺の血液は羊齒の葉脈のなかを流れてゐた。）

身に迫る瀧のやうな殺氣よ。

俺の掌で銃身が汗をかいてゐた。

見ろ、目の前の水は俺の沸騰の白い泡を流してゐる。
何處へ行つたのだ。

白犬！ 白犬！

滑は導火線よりも燃える

俺は枝を取つて空に火の輪を描いた。

心は輪に暗い奈落を見つめる。

墜落！ 墜落！

彼時、俺の橋のプロペラが傾斜を廻轉した

窒息しそうな雪煙りの中を俺の虚無が轉つた。

谷底の雪の上に等身大の石膏型が出来た

俺は死の白布に包まれて息してゐた。

奇蹟！ それは俺一人に容された経験だらうか！

徑のない谷底を人影が歩いてゐる——

頭の中に甦つた火の本能がそれを追つた。

この言葉なく動く道標が連れ出してくれなかつたら

俺の罽褸は薬袋の商標になつたらう。

あゝ、その上にそれにも増した驚駭は、恐怖は、

幹々を鳴らす吹雪の中でのその人影の行衛不明だ！

俺の疲労と恐怖が打かつて扉と共に倒れ込んだのが、自分の小屋であつたとはい

雪 雪 闇の中の雪の渦巻……

この酒は苦味丁幾より苦い。

ランプに響く雷のやうな雪崩より
遠吠に狼の群を想像する方が増した
壁に凍りついて山刀と村田銃ある。

雪 雪……

一體この意志は俺を殺さうとするのか、生かさうとするのか！

潜水夫

青い水の中に無数の噴水が噴上げてゐた。

水の虚無にぶら下るとき、俺はいつも放心に似た郷愁を抱く……

青い魚の双がとんできて、幾度毆に注射していつたことか！

船！

船！

鱧の口のやうな舳先、マストと煙突の横顔が……

X線にかけたやうに水の螢光板に撮つてゐる。

——吃水線で波を火にして進む

この船の航行を沖で見たことがある。

……白と黒の暴風雨、

その日、海は白齒で一杯だつた

閃光燈臺は眼を刺すだけであつた。

船は時々、波の上へ投上けられる骰子の點であつた。

雨、雨、俺は濱の松の木を抱き

一、二……度目の難船をしてゐる氣がした。

(ああ 夜明けよ！)

——鋼鐵板の××丸は自らをこの海底の薄明に署名してゐる。

船室へ降りる欄干の蛇を握つた。

扉のペンキは昆布の一揺れの俺の影を喰べた。

……潜水服の上から胸ぐらに穴が開いた！
死體！

十の死體！

天井にくつついてゐる蠟の手足、

水の中を流れる水の感情に揺られて

この酒精漬はもつと上へ浮び上らうとしてゐる……

眼玉を喰べた魚が船の瞳孔から逃げた。

俺は十の復讐を抱いて

階段の音を

盗んだ

……

線路工夫

兄弟！ 二人の鶴嘴が揃つて空から落ちる
その度に觸れるので月はだんだん落ちてきた。

線路だけが水のやうに光つてゐるから

俺達は船頭のやうな氣にもなる。燈火は遠い。
唄はやめろ。砂にさゝる鋼の音が俺達の命だ。

青燈だ！ いまいましい汽笛だ

夜明に見たのは首のない胴であつた。

足で押へてゐても線路のなかを震へが走る。

女のことを考へてゐると空想と一緒に轢殺されるぞ！ 兄弟！

俺達二人は纏れ合つて草のなかへ轉つた。

窓々が並んだ明りを旗のやうに振つて通る。

俺の頭は地面ではづんでゐた。飛んでゆく火の粉を見てゐた。

……もうすぎた。赤燈だ。

追かけろ！

公

園

浴 場

銅の湯槽が私のもになった。

タイルの白い床にざあざあと溢れる湯が

ガラスのせいらぎを作つて朝を流す。

女の子がゴム人形になつて坐り

桶に被せたタオルを風船玉の頬が吹いてゐる。

トンボの眼玉のやうな石輪玉もれ上り
天井の色硝子を映して女の兒の瞳へ近づく。
幼い頃は自分の夢を作るのが上手だな！

からだ中を眞白な石輪にしたので

私も南洋土人になつた。

皮膚には生毛の感情が甘へてゐる

ぶすぶす不平を云つて消えるものがある。

感觸を失つた思ひは洗ひ流して了はふ

……鏡の前で私だけの俄雨にたゞかれる。

顔にひつついた髪の毛の中を水の感情が流れた。

私は小鼠のやうな自分の……を見る。

風 邪

じくじくのハンケチは脳髓の皺だ。

詩はみな鼻汁になつてしまつたらしい

火鉢の灰に落ちる音は遠い跫音だ

眼を伏せると炭火と鼻の頭が赤い

原稿紙に落ちたのは青い眼玉だ。

この鼻汁は時計のチクタクの仕業か

枕時計をジジジ……と鳴らしても鼻汁はとまらない。

遠い電車の響きが私の窓硝子で釣草を振る
隣りのアンテナは虫の鬚だ。

鼻から大きな嚏がとび出した

檜葉が揺れる。飛上つた尻は畳へ落ちる

鼻の穴の雀が青空へ逃けてしまった。

蟲

暗いので石垣が鳴いてゐる。暗いので。
風が来て樹の葉がみんな虫になった。
溝を流れてゐるのも蟲だ
覗けば眼が光る。

右腕をかすめた自転車は蟲籠であつたらしい。

蟲だ、蟲だ、みんな蟲だ。

樹葉が尖つた口から冷い唾を垂らした

頸條に落ちた蟲を指がつぶしてしまつた。

私だけは蟲になるのをまぬがれてゐる

が、足駄の齒の蟲が素足の足裏へ這入らうとしてゐる

蝙蝠傘の黒に巢喰ふ蟲を柄から掌に感じる。

結局この徑は私を白い齒の彼女へ送届けるまでに、

私を昆蟲のやうに泣蟲にし

頭に細い釣竿ほどの觸角を植付けるだらう。

朝

このボンヅ井戸は嫌な泣き方をする

私はまた首をひねられる鶏を思ひ出す。

水の束が泣く兒のやうに洗面器を踏み鳴らし

樹洩れ陽が濡れた足の爪をなめる。

葉影一杯の洗面器から雀がきこえる。

水底の陽炎へ兩手を挿入れると

手首は水際から切り取られて

白い磁瑯に描いた果物のやうに曲つて光る。

これが女の手を握るのに餘りに醜かつた手だらうか！

私は嬰兒のするやうに手を陽に翳した。

皮を剝いだやうな指に女の血が流れてゐる……

水が腕を傳つて腋の下を擦つた。

馬

馬の鼻が馬方にくつついた

馬よ。押すな前の車が止つたのだ。

街路樹に足をとめて私は脊中一杯に馬の首を感じる。

夕方は撤水車より涼しくなつた

梧桐の葉すれが濡シャツから浸みる

葉の間の月をすつかり電燈とまちがへた。

車の心棒がまた鳴き出し

馬よ。親方の影も動き出すぞ。

踊りながらついてゆく秣桶に尻尾が度々觸れる

馬よ。お前の首は鈴音の中で何を考へるか！

私の眼にはお前の親方の女の顔が浮ぶ。

厩の臭ひよ。干草の臭ひよ

脚を抱いて沈む鐵砲風呂の臭ひよ。

穴

青い上衣は土管に抱きついてゐる。

赤土の穴での息は胸毛に冷い。

女女……白い足の泥がお釜帽子をなぐつた。

自動車がガソリンの臭ひをさせないのと

女が體臭を持つてゐないのは淋しい。

野菜のやうに赤い土を頭の上へ放り上げ

シヨベルに足をかけ、手の甲に息を吹く。

この穴の朝からの深まりが

電柱と鈴懸樹を一尺短くした。

降り出した雨が電線にとまつてゐる

口を開いてゐたら水玉がとび込むだらうか！

いやいや、呑んだ煙草を内臓から吐き出して

この穴を雨空へのパイプにしよう。

旅

走るばかりの汽車は信用がおけない。

私の頭脳から揺り出される女、女、女……

空気枕ではゴム臭い乳房が弾み

硝子の中では髪と齒ぎしりの音

白い朝が硝子の外を走りつゝ眼を覺した。あくびだ。

硝子戸が窓から畑へ飛び下りると

朝は白い手をぬつと差入れる。

私の頭を壓へてゐた真の煙は羽毛であつた。

皆消えてしまつたので少し可哀さうだよ。

鍊齒磨は白いので終りまで押出したくなる

鏡を見れば女の齒だ。

顎鬚よりこはい毛が私の齒をこすつた

私の顔は鏡をゆがめた。旅だ。

W・C

洗面器のやうに白い便器の中で
勢のよい一本の放けがナフタリンを弄ぶ。

大膽な放尿ほどこころよいものはない！

私の齒は苺の吸口をくたくたに咬んだ。

眼鏡の下から煙とアムモニアが眼にしみる。

漆喰塗りの壁の中を汽車が通つてゐるらしい。

廊下をわけの解らぬことを喚いてゆくものがある

どうせ地下室だ。地震がきたら終ひさ！

放尿は頭腦をよくするか！

洗ひ流しの水で便器が含嗽を始める。

便器よ。くだらない心配をみんな飲み下してくれ。

軽い熱病

天井から乳色の皿がぶらさがつてゐる
静かに歩いてくれ、顔の上へ壊れ落ちそうだ
くろすんだ電球に私の顔は小指ほどに小さい。

床の上で三十度廻轉したらもつと空が見えるだらう。

梧桐の葉。銀座が歩きたいな。夏帽子だ。

さつきの蜜蜂はどこへ行つただらう。天井板の木理。眼。

蛇、蛇……柱にさがつた青い紐。

シャロック・ホームズ、殺人……

いびつな窓硝子に隠された錐。匕首。

湯になつた膀胱が鼻のあたまへぶつかる。

誰かゐるか……氷がたべたいな！

冷いレモナーデが飲みたいな！

小刀がなめたいな！

の
み

蚊帳の腹がときどき頭までふくれてくるが
蒸暑さは鼻のあたりにちんでゐる
眼玉は湯たんぽのやうな右腕をのせて
左手が胸の上で魚の腮にふれてゐる。

脇腹を歩く蚤よ。

何處へ隠れた！ 蚤！ 蚤！ 蚤！

寝衣をすてゝ探しまはる白い敷布に
松影のやうな蚊帳の影を見出る

また電燈から零れた青い粉の羽蟲

蚊帳に包んで電燈の首をひねり

蚤を追うた眞剣さに苦笑を送る

今度こそ寝つかねばならないが

睡眠劑が廻るまでが命だ。

犬

犬よ。紫の舌を垂れた野良犬よ

あばらを蹴られたので舌が長くなつたのか！

植込の濡れ葉が男と女の腫をまねする

噴水の中では青い電燈が泣いてゐる。

白い皿の上で骨のやうなフオークが鳴り

卓の下の薄間で足と足が觸れ合つてゐる

犬よ。卓をくゞつてきたので眼が悲しいのか！

お前の濡鼻の前の私の靴は

今日の興奮に電燈を映して白い。

大理石の斑に零れたビールの泡がつぶれて

皿にあるのは汚れたキャベツばかりだ。

白いエプロンよ。私と犬を暫く追出さないやうに

私の犬よ。お前のラムネ玉で見上げないでくれ

尻尾で瀝青を掃くことをやめてくれ

情をかけることは私に怖い。

紅茶

曇る眼鏡の下から紅茶の香が鼻をつく
ビクターが鳴つてゐるが誰も聞いてゐない
私は沈んだ砂糖の泡をきいてゐる。

甘澁いあと味の舌先に

私は苦々しい昨日を弄んでゐる。

階段の穴から黒の女帽子がとび上る。肩が、胸が……

手がふれて熱帯植物の葉が電燈を迂り落し

白いテーブルに手提げが猫のやうにのつた。

見たことのある顔だ！

私は指紋のついたニッケルの匙をおいて立つた。

階段の金具で靴をすりながら

街路樹に風のあることを知つた。

唾

銀貨をしゃぶる子供の口をして
舌の上の唾の捨て場に迷つてゐる。
ホテルの絨毯の寢床の柔かさに
私の影は縮こまつてゐる猫である。
どちらの扉口にもペンキ塗のボーイが立つてゐる。
廊下の窓をあける顔に噴水が吹きつける
口を突らすにはあまりに暗い庭だ。
私はW・Cで唾の音をきくに耐えない憶病者であり

痰壺と乞食は見〇のも嫌ひな偽善者だ。

大鏡が突差に私を思痛から救つた。

私の前にはモーニングの私

白い泡の爆發で掻きむしられる私の喉と

白い腹の方へ雫りのメスが下りるのを想像したから。

雨

引いた硝子戸が電燈を迂り落して
私の脊中を後からドンと押した。
荒々しく傘を開いて弱い心をまぎらす。

一つおきに前に出す靴に雨が飛びつく
雨水が傘の柄を傳ひ下りてそつと私に悲しみを握らせる。
今頃歸つても電燈を消して寝てゐるだらう。
私は酒をのむと頭が冴えてしかたがない。

舗石が急に明くなり
自動車がビクターを鳴らして通る。
これから家までまだ一時間はかゝる
私は再び白いテーブルが抱きたくなつた。

電車内の女

二の腕までの長い黒手袋の手が
象牙の輪からぶら下つてゐる。

指輪の金が黒猫の眼のやうに底光る。

私の頭ごしの街に氣を奪はれてゐるのか

しかし車の動搖が觸れさせる足を、氣にしてゐるのは私のみぢやあるまい。

眼は鶯色の着物の縞で、馬車馬のやうに蔽はれてゐる。

豚豚豚——私の鼻が腋臭を嗅ぎ出した。

眼を閉ぢて睡らうとしても駄目だ。

電車よ、早く走つてくれ！

日曜日の朝

木の芽の硫黄に降る粉雨……

溝の水がピオピ紙を光らす

街路樹のすきまを自動車^が逃けた。

自由な今朝だ。何處へ行かうか？

傘がバリバリと破れさうに擴がる

降りつゝの雨が頭の上でドレミファ……

樹や石段や窓が白くほかさされた。

ふと目を落す^{アスファルト}瀝青が雨を弄んでゐる。

水がとぶ路面より低く、鐵柵の奥で

地下室の瓦斯燈が呼吸器を病んで光る。

頭を振る。陰氣な宿直室の思ひよ消えうせろ！

ピチピチ踏ねる雨水を濡靴で踏んでゆく

傘を車のやうに廻し、水滴を振りとはした。

ミシン

朝の空気は頸と足の爪に冷く
蟬の衰弱をきくに耐へない。

女よ。ミシンを踏んでまぎらしてくれ。

力の單つたミシンの響をきくつゝ
目にもとまらない針の働きを眺めてゐると
針が私の頭を差すやうで氣持がよい。

女よ。もつと激しくミシンを踏んでくれ。
私にこの僅かな空想を追ふことを許してくれ。
その間にお前の指が小魚のやうに針を避けて
薄青い縞セルに秋を縫込んで了つてもよい。

女よ。ミシンを踏んでくれ。

げんごろう

私の机は髪よりも黒い

原稿用紙のやうに電球にうつる障子の秋。

女よ。私は今もコツプに水を握つて

電燈にくるげんごろうを待つてゐる。

……げんごろうは黒いラムネの玉

休むまなく沈んでは浮き上り。

水の中で遊んでゐるかたくなで純な心よ。

女よ、その黒い瞳でこの水を覗かないか！

げんごろうがいま動かない泛子だ。

げんごろうのバネが壊れて了つた。

私の指がなんべんも黒い釦を突いてみる……

げんごろうは本當に死ぬかも知れない。

女よ來てその細い指で觸れてくれないか！

電 燈

電燈を低く降して机に坐る

電燈は女のやうに覗き込むで、私の額に熱ほい息を吐く。

錐のやうな硝子の尖りを指で支へると

電球は本棚の金文字を映して廻る……

自轉車の矢條のやうに火の線が重り

とんほの羽根のやうに震へてゐる。

耳から外して机に置く眼鏡の

二つの玉に電燈が水仙を咲かせる。

私はまだ白い原稿紙に女の顔を描く。

銀貨

脊廣の上衣に昨日を探れば
ポケットが犬の舌を垂らし
靴下とズボンへ苺の粉をこぼす。

とにかく靴の紐に日曜日を結ばう。

カラーに締められた顔の充血の重さを

振子の足から振り落し……

手の爪はポケットで銀貨のギザギザを鳴らしてゐる。

君ならこの銀貨でどんな一日をたくらむか！

.....

久しぶりで郊外電車の窓に頬を寄せて
硝子越しの緑の枝々に打たれてゐる。

健康な疲れの淋しい夕方を思ひつめる。

前歯の隙で切符を挟みつゝ

釣銭の銅貨の重さをズボンに量りつゝ。

麥

—古い友、Kに—

赤土のねばりの中で地面と靴がすべり合ふ

抜いだ帽子の裏革に曇り空が光る。

友よ。今日のやうに歩いたのは何年前のことか！

僕らの振る手に麥の穂が集る。

友よ。君が引抜く青莖の中で蟲が泣く

嚙みくだく莖の甘く苦い汁にも少年がよみがへる。

然し友よ。お互の苦しみは何も語るには及ばぬ。

僕らは昔のやうに黙つて歩けばいい。

麥の葉の傷の指を口の中で勞りつゝ

浸み出る血の生々しい味に鼓動を充めつゝ……。

歸路

塀ばかりの裏町の、電車も聽えない夜更け
私の影は苔の匂ひのする石塀を歩く。

暗い足の前で私のサンチマンをけつてゆく
時々小石が溝へとび込んで小さな聲をあける
あまりに正直で、私は人を信頼しすぎるのだ。
點燈が頬をふくらまして霧を吹いてゐる。
私の影は塀で二つにまた三つに分れる
よそよそしいその影と私の孤獨が並んでゆく。

犬よ。そんなに吠えるな！

喰ふなら私の影を投げてやらう。

歸つて冷い寢床の穴にもぐり込むだけだ。

時計

公園の門でもう一度解決に迷つた

イエスカ、ノーか。

公園の林の白いベンチが解決してくれなかつた事

雀の動作や、丁字の香にそれてしまった思ひ。

ポケットから時計の三時を取らせば

硝子の中で私の眼鏡が光る。

行かう舗道へ。この足が女の影を踏むだらう。

鋭い笛が十字街の札を廻した。進め！

自動車や自轉車や電車が家畜のやうに動き出した。

山小屋

——槍ヶ岳にて——

顔中の黒鬚に音をたてる男——

熊熊……車座は膝を抱く。

天井裏の圓光におびえてゐる釣ランプ

霧が小屋中の梁と壁と黒影を揺る。

炭火よ。赤い舌をもつと長くのばせ！

毛布よ。冷えた脊中を嬰兒のやうに包め！

休 息

——白馬岳にて——

私の嬰兒 リュックバック 背囊よ。

硫黄より黄い毛茸の中で休んでるよ。

私の昨日を焼印してゐる アイスピッケル 杖よ。

霧とぶ中への昇天を希つてゐるよ。

あゝ、しかし草鞋の下の氷雪よ。

父母を忘れようとする足裏を責めよ。

空氣銃

蜜
蜂

低い生籬。海は圓いものだ。

かどやかなしい朝が芝生を歩いてゐる。

風の中で蜜蜂の白い箱が

小學校のやうに騒いでゐる。

空 氣 銃

爽かな秋の空気を壓縮した空氣銃で
私は雀のやうな木葉を打落した。

眺 望

凭りかゝる幹の皮を剥きながら、
このまゝ血管を爽かな樹液で置換へ
私は松樹の生と位置を換へてもいゝと思ふ。

海が常に今日のやうに青いならば。

曉

暗い聲で井戸と語りながら
釣瓶は夜の水を汲みあげた。

私の洗面器は一杯にそれを受けて
爽やかな曉の色に變へた。

秋

頬にあてる剃刀に秋は深く

青い顎の小さい傷から血がにじむ。
爽かな痛みを運ぶ菫葡棚の風。

黄水仙

水道の水を入れたコップの縁を撫でると
電車が曲線する時の軋みがひどく。

買ってきた一本の黄水仙をその中へ差せば
青い莖は水の中で折れて太くなつた。

学校帰り

蝙蝠傘で弾み合つて別れた。

友の影は電柱に、燈が猫の目になる。

濡れた舗石へ足先に謝罪させつゝ歸る……。

自働電話

硝子越しに雨を撥く鈴懸を見ながら、
自動電話の白いペンキの中で
遠い電車の響と溝の水を聴く。

銀の送話器へ向き直つて白銅を落せば
左の耳で自働ピアノが始まる……。

夏

散策のうしろから追ひ越した自轉車は
曲線カブをかくとき大きい眼鏡を光らし、

續いて並木の夏を一つ一つ通抜けてゆく……。

六 月

緑草の傾斜でする小兒達の草滑り
犬より早く空から滑る叫び聲……

また小兒の白い尻が六月へ登つてゆく。

日 曜 日

投上げたゴム鞠は瓦の階段をころがり
息もつかず飛び下りてくる雀……

少年の両手は日曜日を掴まへた。

春

茶碗のかけらが光る溝沿ひ
舗石が乳母車の影を順送りに送る
白の毛布に包まれた小の朝寝よ。
公園からの靴の光る歩調をとめて
毛布の上に蒲公英を投げてゆきすぎ、
私は指についた白い汁に春を嗅ぐ。

病院

ドアのハンドルの音に手をかけながら。
白服を着た看護婦の心の淋しさは
廊下の窓硝子まで來てゐる春にしばたく。
病室ではスチームが骨を鳴らす。

早春

白い縷帯の中の少女の頬は
薄紙包みの果實を匂はせる。

雪解の驛に電車は齒ぎしりして止り
私の耳鳴りに雀の聲が遠くなる。

城跡

雀の聲は箕の豆よりもやかましい。

濠に沿うた徑。牧牛の尻が夕日を動かして歸る。

落葉

桐の落葉を自轉車がひいて行つた。

葉は赤靴のやうに泥の中へめり込んだ。

亂された朝の空氣に鋭い口笛がのこる。

寢床

けふ一日を消して了ふには

寢床から腕をのばすだけでいゝ。

讀んでゐた頁さへ閉ぢなくていゝ。

やがて隣室の寢息が訝え

雁の聲が鉄をならして頭上をすぎる。

林
檜

齒にしむ林檎の酸の爽かさ

私の口の中で靴の踵が雪を踏む。

解ける雪から林檎を探すといふ友の故郷よ。

黄色い小指の爪を耳の穴に入れる友の癖よ。

雪

黄色い燈火を雪に捨てた。

衣擦れをまねる戸を閉めた。

寢床の石の枕は樹の聲に縮む。

雨

八ツ手の葉が白い雨にたくかれてゐる。

公園の鐵柵に添うてそんなに多くの蝙蝠傘が冬の方へ行く……

電車の軋みが悲しく日曜演奏をまねする。

徹 宵

月光は手洗鉢を鍍銀してゐる……

銀貨の薄氷で手を洗つた。

徹宵の香中で障子が襦を吹く。

萬年筆

短い詩を書かっと思つた原稿紙に
萬年筆から落ちたインキは腫だ。

この詩には秋と電燈が光つてゐる。

蟻

傾斜の落葉に足を突込んだまゝ

薄れ陽を吸ふ樹幹が目前にあつた。

荒れた泥濘の樹肌に

蟻の黒い葬列が急いでゐるた。

朝

朝はまだ白い寝衣を着てゐた。
裸になつて便所の臭ひを捨てた。

鏡の中で襟エリ飾カシが出勤をしめる。

眼鏡

眼鏡へ朝の息を吹きかけて
白いハンカチで曇りを拭く。

眼鏡の中の清らかな階段に
水の季節が光り流れてゐる。

森の中

1

月の出に聲をあけたのは啞蟬。

義足が森中の枯葉を壊してゆく……

何の枝も首縊りによい枝振り。

2

サイダーの栓をあけたやうに冷々と

森の中で木洩れ陽が沸騰してゐる。

私の耳の傍で蜂が提琴に觸れた。

焚

火

小
犬

白い小犬は私の腰にあたり、
鞠のやうに緑草のなかへ轉けてゆく。

私をとりまいて白む晨。

炭酸水

樹影が卓子掛をレースにする

白の上に微風が薄紫を揺する。

青い水平線で

二つの白帆が二本の指のやうに靜かに近寄る

私は友の瞳がそれを追ふのを見る。

勢よくはねる炭酸水の栓の音。

細かい飛沫が顔を噴く爽かさ！

二つのコップでは細い噴水を入交へる。

友よ。コップの雪が檸檬にならぬまに。

鷗

出船後の浅橋のもの淋しさ。

たゞ暗い橋裏や杭の列に

波の反射が金の雲形模様を遊ばせてゐる。

沖の緑の水の上には

白い鷗が飛び交してゐる。

船の人の振つたハンカチーフの数のやうに。

燕

水のうへの輪投げ遊び、

燕は紺をなけ白をなける。

かすめてゆく水面に木埋ちくめが作られる。

雨上りの明るい夕暮！

水色の水と、桃色の水……。

小蒸氣船

玩具のやうな小蒸氣船が
青葦の中へ隠れてゆく。

次第に遠くなる斷音^{カタコト}。

密生した葦の上へ

煙の輪が一つ一つとび上る。

皿のやうに扁平に廻り乍ら。

私の空想が一つ一つ晴れた空へ昇つてゆく……。

鞞

鞞

オパールの陽差しにコスモスの亂れ咲き。
郊外住宅地の美しい挿繪。

花々の上、雲もない青空まで、

鞞と少女は飛び上り、

急ち鞞のやうに落ちてくる。

空へ上り、また花へ落ちる鞞。

軽く純な振りよ。いつまでも幼年時代を振れよ。
鐵の輪の軋みよ。いつまでも小羊を眞似よ。

杉
林

杉木の幹々は格子を連ねてゐる。

歩み毎に、私の兩側に新しい數十本が整列する。

これは何といふ整然たる思想であらう。

暗緑の木下闇の彼方の、白金の扉の神々しさよ。

この嚴肅な條理は私にあまりに尊嚴である。

ああ、私は一條の路のまゝに導かれる。

時折、別れ別れに失はれてゆく蹠音に悲しく立止りながら。

そして杉林を出る私の心清は、

雑草やうに淋しく風に吹かれる……

蟬

緑の樹林の信號が鳴つてゐる。

透明に重なる硝子質の廣葉。

青桐の瑤瑤の幹の薄光、

その高さ有一點、蟬の銀色の薄羽が透いてみえる。

そして蟬の腹は絶間なく顫動してゐる。

頂點まで顫律の昂るとき、

信號は傳達し、

彼方の部屋に新たな合圖が鳴り出でる……。

(彼處の青い樹肌に、また私は

蟬の腹の動く努力を見出すだらう。)

かく心靈の信號の飛躍を追うて

私は靜かに樹林に入る。

竹
林

恐しいばかり嚴肅な瑤瑯製の竹林
劍のやうな葉の影の重り。

私の魂を青い牢獄に閉込んでしまはうとする

この冷い無言の眞理の靈場。

私は磔を取つて發打と投げやる。

意外に高い第一聲

續いて疝高い響が柱の一つ一つを鳴らしてけし飛んでゆく。

その響の中の苛立しい反抗の響きも

ああ、心情の力弱さに外れてゆく……。

そして反響は悲壯な交響のうちにきえる。

廢園の春

廢園の石版畫の憂鬱に

微風の感覺が恢復してくる。

灌木の赤錆びの鐘をのせて

草の芽の築山の胸は膨む。

疲れた獸皮の池水から

蒸發する息が慄えてゐる。

散策の憂鬱兒に

小鳥の半音が囁く

(古い戀も歸つて來よう)

埋 葬

夕陽に燃えてゐる松樹の間に

黒と赤の泥繪の人の輪。

赤土の穴深く柩は下される……

投げられる土塊の響が啜泣を鋭くする。

人々は長い黒影を曳いて列んで行つて了つた。

樹肌を鳴らす夜風に土の香は濕り
盛り土の上に赤い月の提燈が揺れた。

焚 火

漆黒の闇に焚火は赤々燃える。

内陣の如く凄じい火焰の反照

黄金神の如く人々の半面が耀いてゐる。

頭上から松籟が強く降りてくる。

車座の人々は焰の赤旗に各自の運命を凝視めてゐる。

あゝ、朱金の嵐の中に何の鍋か！

彼等は黙々と一日の憂苦を焚き

悲憤を焚き、何を煮るか！

焚火は夜毎、彼等の生の晚餐。

夕 暮

緋の空に火龍ドラゴンの息は衰へる。

岩々の城壁に夕靄が懸つてゆく……。

遙か奈落の浪打際で

柩の蓋の響が轟々鳴る。

その後は、海神族の挽歌……。

星はこの夜の黒檀の柩に、一つ一つ釘を打つ。

夜光蟲

黒曜石の夜の海上に

夜光蟲の青い燈火行列が點る。

夜氣に浮く靜かな死顔の光。

海に墜ちた澤山の精靈が燃えて
今宵、荒い海神を祭祀るのか！

拾遺

隅
田
川

1 早 春

窓——越して来た家を船室と名付けた。川に向つて食卓に坐る。
隣人「工場の油が流れるやうになつて魚は死んでしまひましたよ」
窓から釣が出来る。釣をしようとは思はないが、たゞ窓へ近づいてゐる川波と春へ硝子戸一枚
を開けてしまひたい。

150

水——石垣を舐める水を眺め暮しつゝ、裏葉色に濁つた水にいつか春が解けてゐるとは不覺で
あつた。

輝かしく霽れた早春の空には信用がおけない氣がするけれど、水の色に解けてくる春の感情に
は否み難い浸透性がある。

揺れる陽光は水の面のパラフィン包紙。

惜しいことに隅田川には川原がないので陽炎の遊び場がない。

雨——樋の中でドレミファ……を繰返すだけの雨。

川は防水マンントのやうに貧寒に薄光りしてゐる。もう小學校の子供の歸る頃だ。水面には水す
ましが多勢遊んでゐる波紋。

白い霧、蓑、藁小屋、白犬を乗せて青い竹筏が長々流れてゆく。海までゆくに二ヶ月もかゝる
とさふ風に。

151

鷗——強い風は硝子戸をガタガタいはせる子供。鷗の群は風の中で廻つてゐる風見の鶏。鷗は
白。櫓は白。

鷗がなくと火鉢の猫板の上で猫がきゝ耳を立てる。私は隣室の絹つれを聴く。

猫——彼女と瞳の覗きくら。先に目ばたきした方が愛情の薄い證。

しかし彼女の心を捕へておくことは彼女の耳に蓋をするよりもむづかしい。彼女の香味と肌膚りと体温は私の膝から滑つてしまつた。

垣根から垣根への逢曳。瓦から瓦への逢曳。何處かで嬰兒が泣いてゐる。

石垣——石垣は朝から舌舐めづりしてゐる。麥酒の泡が吸こまれてゆく。

君の顔はどれが口だか鼻の孔だかわからない。まるで顔全體が笑つてゐる、一錢蒸汽が通ると笑聲が一層大きくなる。

顔にからすのおきゆう（草の名）がすえられた。病氣はよつほど性悪だと見える。

糸に澤庵をつけて垂すと口の中から平家蟹が出てくる。

無花果樹——無花果樹の芽は白緑を含んだ畫筆。やがて舟を配圖して春の出品畫製作が始まる

玄關の九官鳥が呼んでゐる。馬鹿！ おやきくさま！

一錢蒸汽——娘さんの耳に陽があたつてゐる。耳輪が欲しい。女でも薄い髻が生えるものだね。

羊羹が喰べたくなる水の色。流れてくるもの、竹桿、下駄、帽子、黄い手拭、鼠の死んだの、猫の死んだの……もうやめよう。

鷺鳥——大きな鷺鳥の飼養所。

私の窓はすばらしく白くなるだらう。白いレースはいらなくなる。だが聾になるかもしれない。

朝——雀が雨樋へきて私を起しゐる。コトコトコト……今日は日曜だからもう少し寝させて。

蛇——石の上に青い小蛇がのつてゐる。穴から出たばかりでまだ眠らしい。
松の葉の風に笛が流れてゐる。

足——お嬢さん、素足は隠すものですよ。それでも白足袋が眼に痛い。

2 水上往來

吾妻橋。横倒しにしたデアイアントの骨格。肋骨の中を車や人や犬が絶えず通り抜ける。體臭の強い鼠共のやうに。

一錢蒸汽。このバナ仕掛の玩具は古くて錆びてゐるが煙を輪に吐くことが上手。

船。よくまあ色んな形があるものだ。よくまあ遊ぶものがあるものだ。ボイラー、電車、酒樽、

材木、南京米、メリケン粉、嬰兒、犬、猫、雀、等等。

肥舟。井んだ桶を赤い陽が照して罐詰のやうに綺麗だ。

渡舟。これは何升楳ですか。もう今朝から何杯目ですか。

白々と暮れる水の上で人は一寸悲しくなる。子供は五重塔が見えるといふ。

モーターボート。電氣船製造機。移動式で製材鋸よりうるさい奴。

新造船。第 海神丸。酒樽より新鮮な香氣を放つ。また一人川の中へ突落された。笑聲。足拍子。

夕。ビール會社に火がついた。探照燈のやうに光る硝子窓。

夜。街燈が一度に消える。停電。對岸で狐火を眞似してゐるのかしら。

朝。靄深い午前五時。牛乳屋が車を鳴らして河岸を通る。櫓聲に撥釣瓶の田園を思出ながら。

3 水死人

156

天井を眺めながら空想するといふ獨り遊びを私は何時頃から覺えたのだらう。いつも失戀してゐるやうな充ち足りない心も、目覺めの一刻を仰向いたまゝ天井にうつる波の反射に白い花束や顔や帆船の明るい空想をつゞける。

川に靄の深いときには天井の雲形模様は曇硝子のやうに薄く。寢床へ流れ込む空氣は冷い。

「お客様！ お客様！」

階下から聞える聲に私は心膽の急激に收縮するものを覺えた。それはこの河岸の忌はしい隠語である。この頃は毎日川面を漂うてゆくお客様を見ない日はない。それから些細に調べらるなら行人のそのやうに實に百態百様である。突臥して暗い水底を眺めつゝ空樽のやうに響を浮かしてゆくのは男である。あられもなく仰向のまゝ女は帽子箱のやうな足を出して流れる。或ものは二つの胴に薄紅い紐がキリキリ喰ひ込んでゐた。或ものは嬰兒を脊負つてさへるのであつた。時にそれは引潮にのつて白日に恥ぢるものゝやうに落ちのびてゆく。時には門付けの通路のやうに、棧橋から棧橋を石垣をたゞく波の唄につれて自らを揺り移してゐた。又潮加減で日に二度も往き還りすることさへあつた。

「さあ渡しますよ」

無花果の葉に蔽はれた隣りの棧橋下、爺さんが桿を持つて貝殻のやうな波紋を立てゝゐる。大きな菰蔽りの漂ひよるのを待つのは、たまたま嫌な氣持だ。花屋敷で身振りする人形よりも固定した手足は青白く蠟よりも透きとほつてゐた。髪は薄緑の水中で水草のやうに漂うてゐた。

157

私は齒で下唇を噛んで棹をついた。棹の力を抜けて重い浮體は杭に手をかけやうとするもののやうに同じ場所で身を揺つた。私は嘆願の心で更に棹をついた。私の顔はきつと泣き出しさうであつたらう。丁度それは幼時蠅蠅を小刀で釣糸から切り取つた時の氣持に似てゐる。

先隣りの棧橋でもう一本の棹が待つてゐる。霧の中で陽を受けて底光りする川波を見つゝ私は彼女が品川沖へ早く流れ出て了ふことを願つた。彼女はまだ斯うして幾本の棹に押出されることだらう。檢死等の面倒さから、新聞に美人と出るであらう彼女の水張れの醜惡さから、或は精神的な陰影への恐怖から人々は彼女の迎り着くことを拒絶するであらう。

しかし私の氣持に於いては更に利己的なものがあつたことを否認しない。私に棹を押さしめた事、或は單に私の眼に觸れた事さへが私の今日を不幸へ導いたデビルの仕業のやうに思へた。私にはその日の朝餉は白飯にさへ屍の臭氣があつたから。

外國の都市には水死人を並べて引取人の探しにくるのを待つてゐる建物がある。ゾラの或小説の主人公は勤めの途路其處をよく通つた。そして彼は妻の情夫の溺死を企てゝ、死んだことを確めるためにその建物を覗き眼窩の大きな彼の屍を見出した。

水死人が多くなつてゆけば東京にもそんな建物を作らねばならなくなるだらう。なんて忌々しい事だ。

秋の深まりを告げるのは何よりも虫の音である。家人の寢静つたころ戻つてきて寢床に就くと、電燈を消した蚊帳の中まで對岸の蟲の音が近くで變壓所が唸るやうに響いてくる。

「あゝ、あゝ、助けて！」

女の聲が私の眠りを覚ます。近くの船宿から小舟を漕ぎ出す音がする。斯うして投身者が助けられるのもあるが、水死人は夏から初秋に最も多い。そこには死に就くものゝ心理の機微が覗かれる。私は投身者の心理と水溫との因果的關係といふ小研究題目を空想したりした。その波の映る天井ももう私には遠い思出になつた。

震災後私は山の宿河岸の自分の家跡へ一度も行つてみない。その當時あの河岸には水死體が舟蟲のやうに竝んでゐたといふ事を聞いたゞけである。

三〇月。淡雪。屋根といふ屋根が鯉になる。工場の煙突がとほけた缺伸をする。川波にはもう鷗が遊んでゐる。

四〇月。とうとう雨になつた。女の子のお尻と手首を踊らせて花見船が戻る。

五〇月。縞蜂のやうな短艇が三つ滑つてゐる。堤の上を桃色、緑、紫の旗が走る。走る。

六〇月。塵捨場と材木置場の河岸に蝙蝠がとぶ。何處かの軒で風鈴がなる。星一つ。

七〇月。煉瓦造りの橋梁の中は一等の避暑地。漕ぎ入れた舟が寝椅子になる。天井には波の反射の花レース。もう一つの避暑先は千佳手前の青葦の中。葦の莖には葎切りの卵がある。持つて歸れば猫に喰べられて了ふ。

川開き。隣りのお嬢さんと始めて口をきく。今度こそ見落さない。音がしてから首を上げたのぢや遅いわ。でもお嬢さん、花火よりも美しい貴女の瞳。

八〇月。對岸の屋敷でカナカナ蟬が鳴いた。氷店のやうに提灯を並べた船。三味線。女。女。和製ゴンドラの中で夜を明かす男女の幾組。

西瓜の皮が今日も澤山流れてくる。一體誰かこんなに食べたのだ。夕潮が緑に澄むと秋が流れ込んできた證。水底で瀬戸物が眼を光らす。子供達よ。もう土左衛門の眞似をするのはおやめ。

九。四手網の目からこぼれる魚の方が多い。一晚中かゝつても月を掬へない。

との粉色の水が沓脱石まで上つてくる。横さまに流れる船が硝子戸に突き當りそうだ。鰻釣のカンテラが向岸で徹夜する。

十。一錢蒸汽の窓に沿うて夕の食卓が流れ、電燈を圍棋が流れ、蓄音器が流れる。

十一。一つの艦を船頭夫婦が竝んで漕ぐ。腰巻が赤い。七輪の火が赤い。この部屋にはまだ電燈がこないのか。

十二。雪の夜更。橋の上は犬も通らない。欄干の燈が頬を圓くして白い蟻の群を吹き出してゐる。暗い虚空と水底の廣告燈はまだ起きてゐて、寫眞の現像をしてゐる。

私はこんな夜、橋を通るのが一番好きだ。つまづくやうな乞食が坐つてゐないし。

一。小さな松を飾つた船。眞夜中泊り船でどなる聲。

また博奕の喧嘩か！

鵠の聲。

二。支那蕎麥屋のチャルメラの夜更け。二つ番の鐘にあける雨戸。川に映る遠火事を震へながら肩を竝べて見る戀仲。

島の畫家

抱き合つた幾群が暗い船尾甲板を埋めてゐる。罎の樽のやうに凄惨な物凄さが漲つてゐる。若し誰か青いカンテラでも照したなら人間が魚のやうに跳ね上るのを見るかもしれない。星は紙のやうに零れる。海風は拂塵はたきをかけるやうにひどい。寒気が彼の夢を吹きぬけ。やがて海の中だといふことに気がつくのでNは私を揺り起す。

「海を覗いて見ろ、燐を塗つた顔が並んでゐる……」

といつてしまつた私は「彼は投身もしかねない」といふ冷い双物を心臓に感じた。私の聴診器は推進機の廻るのを判然ときく……

彼は盲のやうに白いペンキの板を指先でコツコツ叩いてゐる。船酔が胃袋で醗酵してゐるらしい。彼が先に酔つたのでどうやら私は助かつた。

「オイ、金盞をもらつてやらうか」

「さつき水夫と喧嘩してた馬鈴薯ね、ありや梅毒だよ」

彼の返事から彼の小さな反撥と氣弱さを指摘することはこの場合差しひかへた方がいい。

船特有の體臭が誘ふ軽い眩暈は彼に煙突から烏がとび出してゆくことや、青空に母親の顔があることを發見させた。

こゝの港にも口眞似をする悪戯者が松林に隠れてゐる。
「新島までの切符で波浮に降りていゝのかしら」

波浮。孔雀石の灣。松の樹に汽船が釣されてゐる。あんな小さなのに乗つて來たのだらうか
彼の第一印象——この景色は船のやうに眩暈がする。

後から來た女連に差木地まで何のくらゐかときくと、私達の荷物を頭にのせてさつさと歩き出
す。烏の羽根の頭髮。紺飛白。鐵漿。

N! もうバスケットを頭にのせて歩くまねはやめろ! そら、また落して齒磨粉をすつかり
零した。海からの風はそれを花粉だと思つて草の上へ吹送る。

砂地は焼灰のやうだけれど私は草を歩かないことに決めた。強情な彼は蝮蛇に咬まれてみるが
いい。

宿屋の縁側で彼女に心付けをしようとするのと逃げ出した。Nが探しに出てみると石垣の上に青
薄と牛の首があつた。海は目薬よりも目にしみる。彼は何のために道の中央に立つてゐるのか忘
れてしまつた。

「そのうちに白い石垣から出てくるだらう」

Nは誰とでもすぐ仲好になる。彼の脊中に蠅がついてゐないことはない。彼の足に砂がついて
ゐないことはない。彼の後から犬がついて行かないことはない。彼の寫生してゐるとき子供のゐ
ない時はない。

海。——牛の腫のやうに丸くて光澤がある。青い海を腫に持つてゐたら何處まで見透せること
だらう。空氣より向ふを見ることは恐しい。

岩礁。——水の中で膝を曲けたり伸したりする。あんなに體操をして疲れないかしら。

いつまで潜つてゐるのだらう。よく息がつよくものだ。

波。——三十打のサイダーを一ぺんに壊してみたい。

一體どれだけ花火を揚げるつもりだい。

彼。——私が海へ這入るのは日射病豫防である。

チューブの青を皆押出してやらう。私の腕や腹の皺に白い食鹽が出来た。

彼は猿股の紐を通すことを一日送りに送つた。それだから彼は漁夫のやうに先を藁でしばることもしないで海を汚す。

彼は郷里への手紙を一日送りに延した。然し毎晩一度は手紙を書きたくないのである。殊に漁火と星座との相違——星はいつまでも隣り合つてゐるだけだが、漁火は實際に手をつないだり離したりするといふことを發見してゐるときなど。

保険勧誘員の爺さんの世話で素人の家へ移つてから、彼は宿屋の前へ寫生を仕上げにゆくことを一日送りにしてゐる。

これらのことが彼を氣懸りにし、不自由にし、辛抱強くし、憂鬱にしたが、またこの一日延し

が彼の明日の希望となり、鞭撻となつた。また同時に彼を明日の怠惰へ導きつゞけた。

斷崖の上の玉突臺のやうな草原で白い蝙蝠傘が牛を寫生してゐる。濕りを帯びて軽い絹のやうな朝の空氣に、この白い氣球は陰影深い魂の如く浮んでゐる。

針線の沖へ子供のやうにドレミファを唄ひつゞける小さな發動機船。

彼は白い蝙蝠傘のブルジョアヂイへの反感のために足をむやみと草露に濡らして悔いなかつた。犬がゐたら肋骨を蹴られたかもしれない。この畫描きなるが故に愛すべきソオシアリストは云ふ「弱蟲だから主義者になるんだよ」

夕。——海は鯨を殺したやうに眞赤になる。

出漁。——ゴロンゴロンと樽を轉がす浪音。切々な叫聲。櫓聲……

斷崖に立つて見送る女達の腰よりも、乳房よりも、眼よりも小さくなつてゆく漁船。

三角の新島は薔薇色のピラミットである。

又。井戸に集つた女達は水桶を頭にのせて歸つてゆく。桶の水と牛の瞳だけが庭の中で夕焼雲を映してゐる。夕靄とともにやつてくる感傷癖のために、彼は

「水波女がモデルに欲しい」

といふことゝ、道に出て彼女等の腰付と手の調子をまねする場合とがある。

彼は夜半に小便に起るのが怖い。

三原山の焚火で雲が赤々と燃えてゐるからである。

「牛がもうとなくと睡くなる」

と彼は云ふ。牛は朝からでももうとなくのである。

日中はフライバンの暑さだ。

彼の寫生についてゆくのを拒つてから彼は毎日何か新しい發見を私につけた。

「海は阿米利加へつゞいてゐるんだよ」

「てんぐさ摘りの女は一日七八圓にもなるつて」

「——鐘が鳴つたのだよ。女達は泣き乍ら馳けていつたよ。ほんとにほろほろと涙をこぼしてたよ。どことかの男が死ぬといつて家出したんだよ。それで村中の女が泣いてゐるんだよ」

「牛の子供は僕に何か話したいらしい、やつぱり退屈なんだね」

「牛は薄を喰べるよ。だから乳は青臭いだらう」

「龍舌蘭の中には空がある」

「海の中には活動寫眞のやうな青い光りが差してゐるよ」

「縞鯛は行列して歩くものだね」

「郵便船で伊東へ行けるそうだ」

——等等。

私が先に歸ることになった。彼は波浮まで送つてきた。然し帽子を振り合ふやうな離別を避けるために殊に出帆前に別れることがまた彼のためにもいゝと思つた。私は怒つたやうな顔をして自分の提言を主張した。彼は私に見送られて松並木をすすごと歸つていつた。

然し何處の松の幹に隠れて彼は私の船を見送つたことか。

書信 一。

——暑い濱邊の寫生のためにととうとう日射病にやられた。残念でしかたがない。でも婆さんの

粥を五日食べたらずつた。あの鼻缺け婆さん見かけによらぬ親切者だ。若いときは三崎だとさ。爺さんが自分で賣りとばして置いて連れて逃けたものらしいよ。

牛の聲は寝てきくと癩にさわるね。病床へはその他いろんな物音が響く、鶯、蟬、豚の鼻聲、波音、葉ずれ、蜂、蠅、蚊、疊にとぶ蚤まで——

書信、二。

——裏の物置小屋の爺さんを知つてゐるだらう。ほらよく村の女達が卵を買ひに来た。……あの爺さんが昨日波浮から鮫を買つてきた。四尺もあらうといふ奴を二尾も。この頃の漁といや鯖ばかりだし、きつと賣れると思つたのだね。ところが村にはそれより先に一車も同じ鮫が這入つてゐたのさ。一車も引いて來た奴のキャピタリズム——ちと大けさだが——は憎むべきだが、この純朴な爺さんが二尾を擔いできた場合に於いては、といふ論理は成立しないのかしら。鮫を賣付けた奴も、爺さんの鮫を買はない奴も、爺さんをしてこんな考へを起させた原因も、……すべ

てこの組織が気に入らない。だがこんな事で憤慨するのも島だからこそである。爺さんは呑気なもので鹽漬にするのだといふ樽を探してきた。鮫の臭気はたまらない——

書信、三。

——繪は未だどれも未完成だ。

僕の繪の首のない馬を氣にして馬をつれてきて首を描けとすゝめた男ね。あれの鼻がよく僕の寫生の傍へきて話しかけたあの女だつたよ。僕を家へつれていつて蒸した芋を喰べろ喰べろと云ふんだよ。そして兄さんが一人でこんな處へきてゐるのが悲しいと涙を零す。

その家に十四になる可愛い女の子がある。

繪などはどうでもよくなるかもしれない——

跋

詩ゆえに人生への微笑を失はじ、われらと共に慶ましく Invocation へ連つた、この兄弟の背後から私の投げてやる花束に、詩神よ、祝福してあれ！

強き魂の詩人、金子光晴と親しい私にとつて、その令弟の書に跋を添へる事は二重の喜びである。兄弟の容貌、作品が全く違つた感銘を與へるにかゝはらず、私にたゞ一點共通な「人間性」の聰明さが結びつける友愛から、却つて深くその詩質にまで了解する事が出来るやうに思はれる。例へ金子が地獄の頌歌を歌つたとしても、この白き花は天國の微風に匂つてゐる。それ程、異つた分野に見出す大鹿君の詩は、私に何んの先入見も必要としない。

十年近い彼れの熱心な詩作は、實驗室にレントルトを凝視する一個の學徒としての嚴肅な態度に、彼れの冷徹な理智を不可分たらしめる。詩の本質は感情である。感情の波動は音律を形態し、そ

の深淺が詩人の素質^{テンペラマン}を決定する。然しながら、彼れに就いては、從來の「抒情詩」といふサンチマンタリズムに對する概念を、殊に注意して判斷しなければならぬ。感情はそれ自身として生長するものではない。民族性や本能や、傳統的習性や、それらの潜在性と感覺的な外的條件との織りなす現實面に、徐々に醸成される雰圍氣に培はれ。その生活感情を脱して「人間性」が形造される。故に時代人の一般的な感情は、その背後に潜む傳統性と、より後天的な屬性とによつて、停滞し、より固定的である。抒情詩がその現在肯定的な立場から、やゝもすれば過去への感傷主義に、既成の音律を追ひ、古き觀念の中に感情の殻を守らうとする。この場合、新らしく感覺にめざめた世界が一人の詩人によつて獲得されたとしても、その中に含まれてゐる新しい感情に對して、共鳴し實感し得る普遍性が、一般の人々の胸に要意されてゐない。何故なれば、新しい世界に對して全く新しい感情が生れなければならないから。而し固定感情に憑かれた人々は、それを認める事を肯せず「非感情的」だといふ無理解のまゝに葬らうとする。大鹿君の詩には一片の感傷性もない。夢想も。定心も、また雰圍氣への沈涵もない。従つて情緒の再現にのみ止まらうとする幻想的な影が、悉く白日のまゝに霧散し去つてゐる。寧ろ彼れの詩作は理智的で

ある。しかしそれは感情が稀薄であるといふ理由にならない。彼れは却つて意識的に、從來の生活感情に纏綿する受動的な態度を強力排して、能動的に印象界を獲得しやうとするものである。この意力、この情熱を、構成された主題からのみ見出さうとする皮相的な人に對して私は敢て云はふ。彼れのこの清らかな熱情、語を換へて云へば、感情は悉く形式化されてゐる事である。形式は理性によつて整正される。聞け！ 彼れの詩を脉動つところのダイナミックな音律を。漸層的に昂まつてゆくクレッシェンドに。しかも大膽率直な發想と簡徑な語法とが、句々切り開いて、如何に新鮮な斷層面を展開したか！ この新しい音律の出生は、彼れの心臓が過去に向つて鼓動するよりも、より以上の關心がこれを遮つて、即ち彼れの感覺が新しい世界を鍊成するその荒い呼吸から生れてくるのである。近代様式に對する古い感情の質的矛盾から、或ひは智的扁性の缺陷から、往々にして散文的傾向に墮するものである。然るに彼れは最もリトミックな詩的効果を一切の發想に與へた事に依つても、彼れの稟性の尋常でない事がわかる。

彼れの清純な感情、その新鮮な感覺は「白」である。その生身は透明なフラスコである。この一元色から多様なスペクトラムが紡がれ、イオンの夢やエーテルの新らしい神體が、こ 詩人の

鮮麗な形而上學を形づくる。彼れの感官は、よく磨かれたレンズである。その面に映る清澄な自然のミニアーチュアは、時にそのままの草水晶となつてゐる事もあれば、また時に擴大したタブロオに描かれる事もある。そして彼れの感受性が鋭敏であればあるほど益々、多面に、より複雑に展開してゆく。それは彼れに何等の執心な固定觀念がないからである。故に彼れは自由に攝受し、常に爽やかな感覺に捉へて、悉くその常に「新鮮」な表現を生む。換言すれば、彼れの藝術は感觸の詩である。時に粗く、勁く、時には實に繊細な階音を傳へる。

彼れの感覺が正確で健全である限り、その詩がグロテクスにも腺病的にも、決してデカダンにも墮ちる事はない。彼れはあまりに理性的である。彼れには夢も神秘も、その意識面に於ける事實として取扱ふ以外の何者でもない。特殊な効果をそれらのサンチマンに求める古い詩人の系列には屬しない。

彼れがこの詩集を一期として立つてゐる重大な詩人の轉換期を見逃してはならない。彼れは發展するであらう。その道は生命の坑夫として、人生の内面深く思想の鑛脈をさぐる事がある。何故ならかゝる智的特質を有する詩人にとつて、單に感覺的存在は、感情の泉を澄まし、且つその

源を究める——最後の目的のために準備された——しかく永い間の犠牲を感覺的沐浴に拂はねばならなかつた彼れの眞面目な探究を推し進めずには置かぬからである。

今日、純白な横帆に満々たる海風を胎んで解纜したこの若き水夫は、たとへ暴風に、また海妖の唄に會ふと、その澄んだ理性の羅針盤によつて乗船、ノア號を導き、新らしい生命線への進路を示すであらう。

千九百二十六年五月・緑の代々木にて

吉 田 一 穂

跋

風が吹いた

あらせいとうの花が散つた。

ヒデちゃん

これは僕が君への手紙のやうなものだ。愛する友の本の終りか始めに僕があらたまつて何が書けやう。おたがいに詩も何も書かなかつた時代からの友達だつたね。あの頃はよかつた。気が輕かつた。樂だつた。山登りの話し、高い高い杉の木の話し、めんこの話し、音樂の話し、いろいろな話しを光つちちゃん（光晴のこと）をなかに置いてしたつけね。――

ヒデちゃん

僕はテラスにゐる。

このテラスは實にきれいである。

たんねんにチヨコレイト色に塗つてある。

出窓に花を置かないで青いものの置いてあるのは何より嬉しい。

ちつちやいカーテンに昨夜のおやすみなさいが残つてゐる。

日曜だつて？

どうりで兵隊さんの靴音がする。

兵隊さんの靴音はおまはりさんの靴音より大きい。大きくて軽い。

きつとあのなかの一人の兵隊さんは、町角で白い風船を一つ買ふに違ひない。何の氣なしに飛ばすだらう。

——幼い時。お湯の歸り。おばあさま。

風船——あがつて行く風船にむかしのむかしの思ひを發見するだらう。

ヒデちゃん、君もどこかのテラスにゐるんだらう。木の茂りで君の顔は見へないが、風船にボントンボントン心を弾ませてゐるのはよく解るよ。

ヒデちゃん

君の「漁夫」はいゝね。

すばらしくいゝ。僕がもつとちやんとものが言へる男だといろいろと書くんだが、残念だけど僕にはそれが出来ない。

漁夫、漁夫

樹蔭は僕の頭に網シャツを着せた。

ヒデちゃん

君の心は紳士だ。紳士といふ言葉がいやならば、君はやましくない正しいほがらかな青年だといふ言葉に變へよう。くすぐつたがらなくつてもいゝ。僕はほんたうによく知つてゐるんだ。君は光つちやんと共に新らしい日本の最一流の詩人だ。僕はよつばらつてゐるんじゃないぜ。ほんたうに思つてゐるだけと言つてゐるんだ。

ヒデちゃん

君が僕に本の表紙には旗か軍帽をちよつと小さいやく書かうと言つたのをおほへてゐるよ。軍帽はいゝね。表紙にちよんと軍帽のあるのはいゝ。僕もそれを頭にのせた氣になる。陸軍大佐位の心もちになる。

君も勿論かぶるのだらう。チェックスロヴァキヤの士官になりたまへ。

旗だつていゝさ。

シヤレた旗だらう？ 他のやつをうらやましがらせてやらう。君はそんなことは嫌いだつたね
うらやましがらせるなんて。ごめんね。こゝが僕と君の違ひだね。

ヒデちゃん

君とよればいつも嬉しい。

君は本が出たらほつとするだらう。つかれが出るだらう。眠くなるだらう。

僕は愛する友のために腹の空気をふくらませよう。君は僕の腹に頭をつけてねむりたまへ。

僕は君のためにどんななかしつけの歌を選ぼうかな、だけど話しあつてしまつて眠るのも守歌も
忘れてしまふかも知れないね。(註ヒデちゃんとは大鹿の呼名です)

ハ
チ
ロ
ー

後記

此集の作品は凡て比較的最近の製作になるものである。此等の作品以前のもの量は量に於いて寧ろこれに倍するものがあろうが、此集をして私自身の主張たらしめるがためにすべてこれを割愛した。

此集に於いては「夕暮」と「夜光蟲」が最も舊く、大正十二年の夏、大島遊行の收獲である。次いで「焚火」は大正十三年二月の作。私に詩稿あることを兄光晴に告げたのも此頃である。「杉林」は五月の作。十月には「燕」を得て次への轉期を約した。

私の詩篇が初めて發表されたのは同年九月、佐藤八郎君の晝草創刊號に於ける「焚火」「廢園の春」である。次いで十月には宮島貞丈君、牧野勝彦君及び森金子と共に「風景畫」を創刊した。

「焚火」篇中の多くは同誌に発表のものである。

同年十二月から翌年三月へかけては短章數十篇を連作した。即ち「空氣銃」の諸篇である。この時代に於ては次の發展への多くの準備をなし得た。

同十四年四月「ミシン」によつて次の轉換を試みた。その頃詩人協會の成立をみたので「W・C」其他を續いて「抒情詩」に発表した。同時に新しき意匠による雑誌「ぶろべる」を發刊した。

同五月「兵隊」一篇によつて開けた視野は私自身の快心であつた。「公園」の諸篇を試作の一方、六月より七月にかけて「兵隊」後篇を練り、八月末には「漁夫」を脱稿した。九月、十月には獵師を推稿し。十一月には潜水夫を完成した。

「漁夫」は十月「日本詩人」に、「兵隊」後篇は十二月同誌に、「潜水夫」「線路工夫」は「祖國」

一月號に、「獵師」は「氾濫」第五輯に發表した。

拾遺中の「隅田川」は一部を「聖潮」淺草號のために、一部を「文藝」のために草したものである。若き頃の生活記念として集録した。

又「島の畫家」一篇は「文藝」に約したもので私の小説執筆の機縁となるであらう。

本集の上梓は最初から小林鶯里氏並に小林操氏夫妻の好意によるものである。

サトウハチロー氏は光晴とも私とも年來の舊知で仲のよい遊び友達である。近來共に詩作に精進してからは一層よき同志である。吉田一穂氏も亦私達兄弟の舊知であり、且はまた「こがね蟲」の跋を書いてゐる。詩作に於いては私の先輩でありまたよき同志である。兩氏が小集に跋を寄せられたことは私に二重の悦である。

高田守久氏のピアノ曲は特に小集のために作曲されたもので私の喜悅である。

上梓の悦びに際して、頃日 貴友情を惜まれなかつた畏友諸氏に、又多くの評言と厚誼を與へられた先輩諸氏に感謝する。

目次

自序

序

漁夫 (ピアノ曲)

金子光晴
高田守久

兵隊

三

漁夫

二

獵師

九

潜水夫

元

線路工夫

三

公園

秋	曉	眺	空	蜜	空氣銃	山	時	歸	麥	銀	電	げんごろう	ミ
.....
九七	九六	九五	九四	九三	八八	八四	八三	八〇	七六	七六	七四	七二

日曜日の朝	電車内の女	雨	唾	紅	犬	の	軽い熱病	w.c	旅	穴	馬	朝	蟲	風	洛
.....
七〇	六六	六六	六四	六三	六〇	五六	五六	五四	五三	五〇	四八	四四	四三	四三	三九

黄水仙	九八
學校歸り	九九
自動電話	一〇〇
夏	一〇一
六月	一〇一
日曜日	一〇一
春	一〇一
病院	一〇五
早春	一〇六
城跡	一〇七
落葉	一〇八
寢床	一〇九
林檎	一一〇
雪	一一一
雨	一一一
徹宵	一一三

萬年筆	一一四
蟻	一一五
朝	一一六
眼鏡	一一七
森の中	一二八
焚火	
小犬	一二三
炭酸水	一二四
鷗	一二六
燕	一二七
小蒸汽船	一二八
鞦韆	一三〇
杉林	一三一
蟬	一三三

竹	林	二六	
廢園の春	二六	二六	
埋	葬	二四〇	
焚	火	二四一	
夕	暮	二四四	
夜	光	蟲	二四六

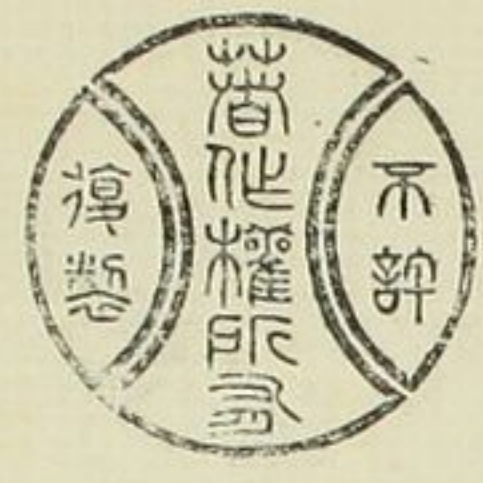
拾遺

隅田川	二四九
鳥の畫家	二五五

跋	吉田一穂
後記	サトウハチロー

大正十五年八月廿一日印刷
大正十五年八月廿五日發行

定價壹圓五拾錢



集詩 兵隊

著作者 大 鹿 卓
 發行者 小 林 善 八
 印刷者 下 平 敬 一

〔刷印部刷印社藝文〕

發行所 東京市牛込區新小川町二丁目四番地
 (振替東京二二〇二番)
 文藝社
 實捌所 東京市神田區美土代町三丁目一番地
 文陽堂

著共子綾林小・操林小

詩歌集

鈴蘭の歌へ

菊半判布装 定價壹圓五拾錢 [來出版重]

全國男女學生諸氏から白熱的の歓迎を受けつゝあるは本書二人の若き著者の心から純真な情熱を持って生れ出で、詩となり、短歌となつたものである。是非一讀をすゝめる。

同じ著者によりて

若人の胸へ

菊半判布装

定價壹圓五拾錢

東京市牛込區
新小川町ノ四

文藝社

東京市牛込區
新小川町ノ二番

小林操・小林綾子共著

〔好評激甚〕

若人の胸へ

菊半判 天金ポプリン装
三百二十餘頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

情熱に
燃ゆる
戀愛の
記録

著者より——此の書を読んで下すつた諸兄弟方よ。若き日のピンクの夢に、日夜毎離れて行く私共の身をなげきつゝ、ハートの高鳴りも日に日に低くなつて行く私共の運命をかこちつゝ、私共はこの書を若人の胸へ永久に刻みつけたいご、ひとへに願つてゐます。後序より。

詩・短歌・AとBとの間に取り交されし感想の三部より成る。美文、麗筆。

東京市牛込區
新小川町ノ四

文藝社

東京市牛込區
新小川町ノ二番

感想集

運命に従ふ者

小林操・小林綾子共著

四六判三百五十頁 定價壹圓五拾錢
函入・美表裝 送料八錢

火の如き愛の記録

著者が最近一ケ年、折にふれて書かれたる感想集である。著者は密の如き家庭生活を営み、より幸福なる人間生活の追求を、より深刻なる人生への探究を目標として、愛の殿堂を築きつゝある。本書を一讀せば著者の燃え上るやうな愛のさゝやさを聞くことができる。

文章報國

◇小林鶯里著◇ [好評激甚]

菊半截判美本 定價壹圓廿錢 送料八錢

偉文 大章 なる 力

文章は人を動かす。文章は國を動かす。文章の力の偉大なものであることは今更ら贅言を要しない。本書は著者一流の人の肺腑を扶るが如き筆をもつて、社會問題を痛論し經濟問題を極論し、教育問題を評論し、以て公明正大、善良堅實なる思想を扶殖せんとして生れたる報國盡忠の精神の表れである。

振替口座 東京二〇番

文藝社

東京市牛込區 新小川町二ノ四

振替口座 東京二〇番

文藝社

東京市牛込區 新小川町二ノ四

小林鶯里著

〔最新刊〕

四六判・美装
三百頁

定價壹圓貳拾錢
送料八錢

文章春秋

珠玉の如き麗筆

春夏秋冬期節の移り行くにつれて、著者の五管に觸れるものは悉く、美文を以て之を表はし、麗句を以てこれを飾り、こゝに雅趣豊かなる美文寶典をなしたのである。ともすれば作文力の缺乏し勝ちなる現代の潮流に本書の出現を見たるは曉天の星の如き感あり。作文の資料とし、情操陶冶の材とし、且つは餘暇の讀物として絶好の書である。

振替口座東京 文藝社 新川町二ノ四 振替二〇一〇二

(忽重版)

◇ 作文の絶好参考書出づ。 雅趣横溢の良書出づ!!

文章三百六十五音

小林鶯里著

菊半截判・洋装
三百餘頁

定價壹圓廿錢
送料八錢

美文麗句 辭典

美文を以て夙に知られたる著者が、独自の筆致によつて、三百六十五日、その日その日に一つの題材を捕へ、自由自在に之を活描寫せるもの。作文研究者にとつて良指針であるは言ふまでもなく四季の行事、山水風月を知らんとする者には、又と得難き良書である。

振替口座東京 文藝社 新川町二ノ四 振替二〇一〇二

小林鶯里校訂

四六判美装
各册百餘頁

定價各六拾錢
送料四錢

近松傑作集

日本の産んだ唯一の藝術家、近松門左衛門の傑作
を選び、正確と嚴密なる校訂を施し、且つ読み易
くするために、振假名、句讀點を施したるもの。
◇本書は早稻田大學及各高等學校國語
科の参考書に採用せられたり。

振替口座東京
二一〇一〇番

文藝社

東京市牛込區
新小川町ノ四

近松傑作集 [以下續刊]

第一編 心中天の網島

○義理と人情と
戀とに悶え、
遂に小春こ、
死出の旅を急
いだ、紙屋治兵衛は近松の筆によつて躍如たり。これは
彼が傑作中の傑作。

第二編 會根崎心中

○……七つの鐘
が六つ鳴りて
残る一つが今
生の鐘の響
生、鐘の響に戀
さともろとも……とはおはつ傳兵衛が義理故に戀
故に手を取つて落行く姿である。

第三編 津國女夫池

○義理、人情、
それにはまつは
る人間愛慾の
苦しみは近松
の筆によつて何れも躍如としてゐる。人間苦をなめつ
くして、永死して行かなくてはならない現實の相。

振替口座東京
二一〇一〇番

文藝社

東京市牛込區
新小川町ノ四

或る學生の手記

◇小林操著◇

(重版製本出來)

著者は小學校を卒へて後八ヶ年の學生々活を送り、男女兩師範に教鞭を取ること數年、今又學生として研究中。本書はその間に書かれたる多感なる氏の血と涙の物語り！戀愛論に大氣煙を擧げ、哲學を論じ、人生を疑視し、深刻なる思索の賜物として、滿天下の學生諸氏に訴へられたるもの、徹頭徹尾燃ゆるが如き情熱を以て終始す。

◇表裝美判六四◇
◇錢拾五圓壹金價定◇
◇錢八金料送◇

東京市牛車水區 文藝社 東京市牛車水區 文藝社

小林 鶯里 著

(五版出來)

釋迦の生涯と思想

四六判美裝
三五〇頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

現今の如く思想問題の矢筈敷く論議せられるとき、本書は唯一の羅針盤である。本書は發刊以來飛ぶが如き賣行きを示し増版又増版を繰返したるは、如何に現代人がこの偉大なる思想に惹きつけられつゝあるかを證するに充分である。

本書の内容

本書は釋迦の全生涯を平易に述べ、不知不識の間に偉大なる思想を得するやうに書いたものである。世に釋迦を書ける書多しと雖も、本書の如く誕生より入滅までを終始書きたるものは、その類を見ない。而も思想方面をも忘却することなく筆を進めたるは獨歩の感がある。

東京市牛車水區 文藝社

東京市牛車水區 文藝社

東京市牛車水區 文藝社

警鐘の乱打

小林鶯里著

四六判 特價
送料 壹圓貳拾錢

混沌又混沌の社會相。七千萬の同胞は疲れきつた。新しい社會を作らうと等しくあせつてゐる。ごうしたらい、だらう!!
百萬の軍隊よりも三寸の舌。三寸の舌よりも一管の筆。本書は百萬の援軍よりも勝る一管の筆力の結晶。本書を讀んで誰か快哉を叫ばないものがあらうか。一刻も早く高樓に登つて警鐘の打者たる人を望む。

名刀亂麻を斷つが如き快文字

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

小林鶯里著 [最新刊]

四六判 美裝表
函入 四百餘頁
定價 壹圓參拾錢
送料 十二錢

眞田の智謀

著者の抱負

大衆文藝、讀物文藝、民衆文藝等の語は抑々何を語るものであらうか？ 著者は夙に民衆文藝の先驅者であり、主唱者であつた。この意味に於て所謂讀物の向上に、換言すれば講談の藝術化に多年の努力を傾注し、着々その實現を進めて來た。今日大衆文藝といひ、讀物文藝といふも畢竟著者の謂ふ民衆文藝に他ならなかつたのである。殊に著者は架空的讀物の力弱きを救はんとして、傳記的讀物に一新紀元を劃さんものとの苦心によつて著したのが本書である。眞田の三代記を、如何に著者が筆を進めたるか？ 興味高尚、而も流麗の筆によつて眞田三代記は躍如として紙面に表れたり。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

國民叢書

◇小林鶯里著◇

四六判美裝・定價各四拾錢
各册百餘頁・送料各四錢

文部省認定——茗溪會推薦の國家的良書！
國民常識の源泉！ 知識の寶庫！ 家庭の必備書！

◇本叢書に對する讀賣新聞の批評

何も文部省が認定したからとか、東京高師の茗溪會が良書として選擇したからでもないが、全く民衆大學の國民常識講座の感がある。實に普遍で通俗で明確な理解が、専門的の諸學科も面白く與へらる。まづこの叢書さへ充分に熟讀すれば大學や中學へ通學出來ないことを苦にするにも及ばない。本叢書が續々と刊行せられることはたしかに我國文化の進歩で、國民の必讀すべき良書である。

國民叢書

頁餘百判六四 切讀册各
著里鶯林小
錢拾四各價定 錢四各料送

編一第	編二第	編三第	編四第	編五第
新しき修養	宗教早わかり	立志より成功への近道	國民としての常識	新聞を讀む基礎の知識
困苦しき修養より脱して知らず識らず身を修めんとし例により、格言によりて、人の履むべき道を叙べたもの。	人類の存する所必ず宗教あり。本選び、世界の宗教中より十大宗教を叙べたもの、一讀宗教の全般を知ることが出来る。	早くものにならんとする人のため社會のあらゆる方面に亘つて立志より成功への近道を説明したものの青年子女に絶好なる讀物。	國民の一人として必ず知らねばならぬ事を選んで、解説を施したるもの、國民たるもの、必ず一讀すべき良書。一讀大道を濶歩せよ。	新聞は社會の教科書、讀まざる者は一人もいない。然るに基礎の知識なくしては解する事の出來ない事がある。本書はその基礎を説明したものである。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

書叢民國

錢拾四各價定 錢四各料送 著里鶯林小 頁餘百判六四 切讀冊各

編五十第 編四十第 編三十第 編二十第 編一十第

論理學早わかり

演説にも、談話にも、文章にも常に論理學は基礎をなすものである。本書の如く平易に述べれば論理學も決して難解のものではない。

青年の進むべき道

國家の中堅とも云ふべき青年が如何なる方面に進むべきかを述べたもので、迷路にある青年の爲めに其の進路を云したものである。

文化生活の基調

文化生活の高唱せらるゝ今日世人はその基調をも辨へないで徒らに上調子に流れようとする。本書はその基調を解し易く叙べたもの。

思想善導

思想善導の急務であることは多言を要しない。徒に六ヶ敷く堅苦しく主張してゐる秋ではない。本書は平易にその目的を果さんとしたものである。

藝術の話

藝術は人類に取つてなくてはならないものである。それでゐて解し難いものである。本書は藝術全般に亘つて平易な解説を試みたもの。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一

書叢民國

錢拾四各價定 錢四各料送 著里鶯林小 頁餘百判六四 切讀冊各

編十第 編九第 編八第 編七第 編六第

新しき年中行事

ともしれば忘れ勝にならんとする我國の風俗國民精神の表れともいふべき年中行事に嚴密な選擇を施し且つ叮嚀に解説したものである。

哲學早わかり

人生觀の樹立は萬人の要求する所。哲學は難解のものとする弊を補ふために平易に述べたもの。一讀哲學全般の知識を得られるは本書である。

偉人の修養

古人の殘した修養の跡を辿ることは現代人の忘れてならぬことである。本書は偉人英雄の裏面に隠れたる修養を選擇したものである。

日常科學の話

由來我國には科學的知識乏し。本書は吾人日常の科學現象を詳述し科學知識の普及を計らんとせるもの。先進國民の必讀書である。

經濟學の知識

文明國民は經濟生活を營まなくてはならない。古來の專門的書物の弊に鑑み、經濟學の根本的原理を通俗的に論述したるもの。經濟學の通

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一

國 民 叢 書

定價各拾錢 送料各四錢 小林立鶯里著 四六判百餘頁 各冊讀切

編五十二第	編四十二第	編三十二第	編二十二第	編一十二第
向上發展の基礎	精神修養	平凡道德	倫理學の話	教育學の話
吾々は向上し發展することが唯一の目的でなくてはならない。本書は向上發展の基礎を例によつて詳しく述べたもの。	吾々の修養は數多あるが、先づ第一に精神の修養をはからなくてはならない。精神の修養が出來て始めて眞の人となり得る。	道は近きにあり、平凡なるもの、中にも眞理はある。本書は平凡なものの中に眞理を認め吾々の行くべき道を示したものである。	人倫の道に就てその概要を述べたもの。最近倫理學研究の聲高し新時代のもの、心得べき大切な事柄である。	國家の消長は教育に基くものである。今日では教育は教育者のみに委すべきときではない。寧ろ一般人の心得べきものである。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

國 民 叢 書

定價各拾錢 送料各四錢 小林立鶯里著 四六判百餘頁 各冊讀切

編十二第	編九十第	編八十第	編七十第	編六十第
理想の家庭	婦人の進むべき道	心理學の話	斯の如き人は成功する	野球の話
家庭生活は人間生活の根本である。本書は有らゆる方面より考察して理想的家庭を建設する指導をなすものである。	婦人問題のやかましい折柄婦人の進むべき道を明かにすることは何よりも大切である。本書に依れば誤りなき進路を見出し得るのである。	吾々はまづ自身を知らなくてはならない。本書は心理學といふ學問を平易に而も通俗的に叙述して國民一般に心理を了解させやうとしたものである。	成功すべき人はどこかに人に秀でた性質を持つて居る。本書は古來の成功者の中から成功すべき性質を抽象して述べたものである。成功者の福音。	現時如何なる山間の地でも野球の行はれて居ないところはない。木若くは初めて野球をやる人のために、易く述べたものがある。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

國 民 叢 書

定價各四拾錢 送料各四錢 小 林 篤 里 著 四 六 判 餘 頁 各 冊 讀 切

編五十三第	編四十三第	編三十三第	編二十三第	編一十三第
音樂の知識	貯金のすゝめ	政黨早わかり	普通選舉の話	家庭科學の話
音樂は最近著しい發展を示して來た。何人も音樂の如何なるもの位は心得て居なくてはならない。本書は音樂一般の知識を述べしもの	生活の安定は總ての根本である。それには日頃の貯へがなくてはならない。本書は貯金に關する道を詳しく説いたものである。	一國の政治は政黨を度外視して考へる事は出來ない、本書は政黨に關する一般を述べて、政黨政治を明かにせるもの。	多年懸案であつた普通選舉法も通過した今日、國民たるものは何人もこの法を心得てゐなくてはならない。本書は平易に之を解釋す。	日常吾々の遭遇する自然現象の中でも家庭生活、日常生活に最も密接なるものが多々ある。本書はこの常識的科學を説いたもの。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

國 民 叢 書

定價各四拾錢 送料各四錢 小 林 篤 里 著 四 六 判 餘 頁 各 冊 讀 切

編十三第	編九十二第	編八十二第	編七十二第	編六十二第
世界の格言と警句	無線電話の知識	無線電話早わかり	基督の福音	佛陀の福音
格言とか、警句とかは不朽の生命をもつてゐる。本書は世界の格言と警句の中から精選してその粹を集めたもの。	無線電話に關する書は多くとも何れも解し難い。本書は無線電話に關するあらゆる方面の質疑に應答し、無線電話に關する凡てを明かにせるもの。	最近無線電話の進歩は著し、ものきため、所がその進歩が餘り著しれてゐない。本書は極めて平易に圖を多く入れて説明せるもの。	キリストの愛は萬物を包むその言葉は新舊約全書にあるが、本書はその中から代表的のものを選んだものである。	釋迦の事蹟は不朽である。その教は經典に示してゐるが、餘りに大部である。本書はこれの中の最も大切なものを抄録したものである。

東京市牛込區 文藝社 振替口座 東京 二〇一〇番

◇るせと主を藝文の者讀◇

刊

月

藝文

誌

雜

[錢一料送・錢五拾貳價定・行發日一月毎]

◆文藝趣味の鼓吹 ◆純粹文藝の宣揚!

語標の誌本

◇埋木となるべき運命の作品を世に紹介して美しく花を咲かせようとするのです。
◇あく迄讀者の雜誌として、誌上を讀者に開放し自由な文藝の花園を作らうとするのです。
◇讀者の作品は絶対に尊重して必ずこれを掲載することに努めてゐます。
◇定價はなるべく安くして、一人でも多く同好の士を得て、共々により高き藝術を作成しようとするのです。

◇每號懸賞募集(毎月十五日締切)

目 種

- 散文(抒情文・叙景文・叙事文)
- 感想
- 短文
- 詩
- 童謡
- 短歌
- 俳句
- 短篇小説
- 戯曲一幕物
- 好きな文章
- 讀後
- 感想
- 批評と感想
- 讀者の面影
- 讀者通信
- 其他

◆文藝愛好家唯一の投書機關雜誌。
◆文藝に興味を持たる士は是非一本を――。

東京座口藝振
番二〇一一二

社 藝 文

區込牛市京東
四ノ二町川小新

